

弥永原 10

—— 弥永原遺跡第 18 次調査の報告 ——



2022

福岡市教育委員会

序

福岡市は、古くから中国大陆や朝鮮半島など東アジアとの文化交流の門戸として、また対外交易や外交の窓口として栄えてきた地域であります。このような歴史的環境のもとに、市内には数多くの遺跡が残されています。しかしながら、都市の発展に伴いやむを得ず失われていく埋蔵文化財については、本市の重要な責務として発掘調査を行い、記録保存を行っています。

本書は、南区日佐3丁目における学生寮建設に伴う弥永原遺跡第18次発掘調査について報告するものです。本調査では、弥生時代から中世までの柱穴群や、弥生時代と考えられる墳墓跡が見つかりました。結果として弥永原遺跡の縁辺部の土地利用状況の一端が判明することになりました。

今後本書が、文化財保護への理解と認識を深める一助となるとともに、学術研究資料として、また地域の歴史の学習の材料としてもご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、学校法人福岡女学院をはじめとする関係者の方々には、発掘調査から報告書作成にいたるまで、ご理解とご協力を賜りました。心より感謝申し上げます。

令和4年3月24日

福岡市教育委員会

教育長 星子 明夫

例 言

1. 本書は、福岡市教育委員会が、令和2年8月24日から同年10月29日まで発掘調査を実施した弥永原遺跡第18次調査の報告書である。

2. 発掘調査は、学生寮建設工事によって遺構が影響を受ける範囲について行っている。

3. 遺構の呼称は記号化し、構造遺構をSD、掘立柱建物をSB、土坑（土壤墓を含む）をSK、柱穴などピット状遺構をSP、その他の遺構（不明遺構、特殊遺構など）をSXとした。

4. 本書の遺構図に用いる方位北は、基本的に国土座標北である。ただし遺構の個別図（土坑実測図）によっては磁北（M.N.）を用いている。磁北は真北から約 $6^{\circ} 20'$ 西偏し、国土座標北からは約 8.5° 前後西偏している。国土座標は、調査地付近の国土座標標準点（国土交通省設置）から調査地の国土座標を求めており、これら基準点は世界測地系（第II系）である。調査区の標高は、同じく国土交通省設置の基準点にある標高を移動して求めている。

5. 本書に用いる遺構図の作成は、調査担当の久住および埋蔵文化財課会計年度任用職員の野村俊之、また発掘作業員の前崎智行（福岡大学学生）が行った。遺物の実測は、埋蔵文化財課技能員の野村美樹が主に行い、製図時に久住が全ての図を点検して修正したものがある。製図は久住のほか、野村美樹が主に行い、また一部を本田浩二郎、山本晃平（埋蔵文化財課）がデジタルトマスを行った。

6. 本書に用いる写真は、久住が撮影した。ただし、SK002出土の赤色粒子（赤色顔料か）の写真については、埋蔵文化財センターの機器を用いて藤崎彩乃（埋蔵文化財センター）が撮影したものである。

7. 本書の編集・執筆は久住が行ったが、赤色顔料粒子については藤崎彩乃の教示を得た。

8. 本調査に関する出土遺物と記録類（図面、写真等）は、全て埋蔵文化財センターに収蔵される予定である。

本 文 目 次

I.	はじめに	1
1.	調査に至る経緯	1
2.	調査の組織	1
3.	周辺の地理的歴史的環境と弥永原遺跡のこれまでの調査	1
II.	調査の記録	6
1.	調査地点の位置と基本土層	6
2.	調査の概要	6
3.	検出遺構	9
4.	出土遺物	24
III.	調査のまとめ	24



1. 調査区東半遺構掘削状況（西から）



2. 調査区西半～中央遺構掘削状況（西から）



3. 調査区東端 SX000-III 区南壁東西土層（北から）



4. 調査区東端 SX000-I 区北壁東西土層（南から）



5. SX000-I 区南側東西土層（北から）



6. SX000-III 区北側東西土層（南から）



1. 調査区西半～中央遺構掘削状況（西から）



2. SX000 上部遺構掘削状況（北から）

3. SX000 上部遺構掘削状況（南から）





3. SK014 土層状況（西から）



4. SX021（焼土坑？）検出状況（北から）



5. SX021 北東区土層①および土坑上部
ピット掘削状況（北から）



9. SK012 ほか X=26～28 南壁側ピット群
完掘状況（北から）



7. SX021 南西区土層③（南から）



6. SX021 北東区土層①（北から）



11. SK007 完掘状況（西から）



10. SK006, SK007 挖削状況（西から）



8. SX021 南西区土層④（西から）



12. SX000（北半）上部構造掘削
状況（北から）



13. SK002 検出赤色粒子写真



14・15. SK002 赤色粒子分析サンプル 01（左上）・サンプル 02（右下）写真

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、同市南区臼佐3丁目地内に所在する学校法人福岡女学院より、同校敷地内における学生寮の新築建設工事計画に関する「埋蔵文化財の有無について(照会)」の文書を、令和2年2月13日付で受理した(事前審査番号2019-2-1171)。

これを受け、経済観光文化局文化財活用部埋蔵文化財課事前審査係は、工事予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地である弥永原遺跡(分布地図番号1015)に含まれており、福岡女学院の学校敷地内ではこれまでも、弥永原遺跡1次、6次、15次、16次の発掘調査(Fig.2)が行われており、今回の工事予定対象地についても埋蔵文化財が存在する可能性があるものと判断した。そのため工事対象地における遺構の有無および遺構密度や深度の確認のため、同地での試掘確認調査が必要なことを申請者に伝え協議した。その結果、令和2年3月12日に試掘確認調査(試掘調査番号2019-308)を行った。試掘調査の結果、対象地中央ではGL-20~30cmの地山直下で遺構を確認し、また対象地東側では旧地形が下がるがそこにも遺構が存在することを確認した。これにより工事対象地では遺構の一定の分布があることが判明し、予定される建設工事等は埋蔵文化財に影響が及ぶものと判断された。この結果を受け、埋蔵文化財の保全等に関して埋蔵文化財課と申請者(学校法人福岡女学院)との間で協議を行った。両者の協議の結果、埋蔵文化財を保全するための工事の設計変更是難しく、予定工事は埋蔵文化財への影響を回避できないことから、記録保存のための発掘調査を実施することで合意し、令和2年7月13日から同年9月18日までを現地における発掘調査の期間とすることとし、令和2年6月5日付で学校法人福岡女学院を委託者、福岡市長を受託者とする埋蔵文化財調査業務委託契約書を締結した。しかしその後、発掘調査開始の前提となる現地における条件整備が諸般の事情で遅れたため、両者の協議により発掘調査期間を令和2年8月24日から同年10月30日に変更することで合意し、令和2年8月17日付で埋蔵文化財調査業務委託契約書を変更契約を締結した。

発掘調査は令和2年8月24日に開始し、同年10月29日に終了した。また資料整理および報告書作成は、令和3年度に資料整理を行い、令和4年3月に報告書を刊行することになった。

なお、当該調査に関する基本情報は下記表のとおりである。

<調査基本情報>

遺跡名	弥永原遺跡	調査次数	18次	調査略号	YNG-18
調査番号	2019	分布地図図幅名	26	遺跡登録番号	0105
申請地面積	126, 155. 35m ²	調査対象面積	270. 76m ²	調査面積	272. 25m ²
調査期間	令和2(2020)年8月24日~令和2(2020)年10月29日	事前審査番号	2019-2-1171		
調査地	福岡市南区臼佐3丁目42番1				

2. 調査の組織

- ・調査委託：学校法人福岡女学院
- ・調査主体：福岡市教育委員会
(発掘調査 令和2年度；資料整理・報告書作成 令和3年度)
- ・発掘調査および整理・報告總括
経済観光文化局文化財活用部
埋蔵文化財課 課長 菅波正人
埋蔵文化財課調査第1係長 吉武学(令和2年度)、本田浩二郎(令和3年度)
- ・事前審査
埋蔵文化財課事前審査係 事前審査係長 本田浩二郎(令和2年度)、田上勇一郎(令和3年度)
事前審査係主任文化財主事 田上勇一郎(令和2年度)、森本幹彦(令和3年度)
事前審査係文化財主事 三浦悠葵
- ・発掘調査および整理・報告庶務
文化財活用課管理調整係 松原加奈枝(令和2年度)、井手瑞江、内藤愛(令和3年度)
- ・発掘調査および整理・報告担当
埋蔵文化財課調査第1係 久住猛雄

3. 周辺の地理的歴史的環境と弥永原遺跡のこれまでの調査

弥永原遺跡が位置する福岡平野は福岡平野は、北側を博多湾に限られ、東側を三郡山地から延びる丘陵性山地、南西を背振山地、および背振山地から派生した丘陵によって画された低地からなる平野である。平野には、南東の宝満山に発し北西に流れる御笠川、背振山系に発し北流する那珂川、また牛頭山に発し北流し御

笠川に合流する諸岡川が流れ、御笠川と那珂川は博多湾に流れ込んでいる。これら河川および、派生する中小河川の開拓作用によって形成された段丘面が島状に断続的に連なっている。一帯は大部分が花崗岩風化層を基盤としているが、Aso-4火碎石・火山灰堆積物である通称鳥栖ロームおよび八女粘土が堆積した台地が段丘面になっている。それぞれの台地上には、井尻B遺跡、五十川遺跡、比恵・那珂遺跡群などの遺跡が所在しており、弥永原遺跡もその一つである。南側の春日市域にある、牛頭山系から派生した春日丘陵に所在する須玖岡本遺跡群は、その多くは花崗岩風化層を表層とする丘陵であるが、そこから延びてくる低丘陵部分は鳥栖ローム・八女粘土が堆積した段丘になっている。これらの遺跡群は、福岡市域の比恵・那珂遺跡群と春日市域の須玖遺跡群（須玖岡本遺跡群）を筆頭に、特に弥生時代から古墳時代の著名で重要な遺跡が多く、古代中国の歴史書にみえる「奴国」の中心的な遺跡群と理解されている（Fig. 1）。なお今回の報告書では、今までの福岡市の報告書では福岡市域の遺跡のみ（逆に春日市の報告書では春日市域の遺跡のみ）を周辺の遺跡分布図に示すことが多かったが、市境にある弥永原遺跡の周辺の歴史的環境の理解を深めるため、春日市側の遺跡分布も詳しく示している（Fig. 1）。これを見ると、弥永原遺跡の東側には春日市側の「弥永原遺跡」、古野ノ上遺跡、川久保遺跡、川久保B遺跡などがあるが、実質的にはこれらは同一の遺跡（群）と言ってもよいと考えられる。

弥永原遺跡（Fig. 2）は上記の遺跡群のうち、福岡市域の最南端に位置しており（Fig. 1）、谷を隔てた東側は春日市域の「奴國の首都」ともされる須玖岡本遺跡群（春日市教育委員会編 1984、井上義也 2009）が所在する。弥永原遺跡は春日市須玖から下白水にかけて延びる標高 16～30m 前後の丘陵（中位段丘）上に立地する。丘陵はほぼ南北方向に延び、南北約 2000m、東西約 500m の範囲に及ぶ。ただし同様またはやや大きな規模を有する比恵・那珂遺跡群が須玖岡本遺跡群に比較すると、これまでの調査成果による限り、遺構分布密度はそれほど濃密ではないと思われる。旧地形図（遺跡の中央から南東の多くを占める、1 次調査＝「臼佐原遺跡」があつた福岡女学院の学校用地造成以前の地形図）を見ると、遺跡南端付近が標高 29m 前後で最も高く（18 次調査の北東側付近）、およそ北側に向かって緩やかに高度を下げ、最北端の 11・12・13 次調査の丘陵の標高は 20m 前後で、以北の沖積地に向かって傾斜して下がっていく。遺跡中央西側（2・3・4・5 次調査周辺）から南西側は、現在は田地造成がなされ旧地形が分かりにくくなっているが、本来は西側は沖積地に向かって傾斜する緩い斜面であったと思われ、遺跡南西端は標高 19m 前後、中央西側は 16.5m 前後である。遺跡中央部には北から狭い谷があり込み、これを境に東西に遺跡は分かれ、かつては東側を「臼佐原遺跡」（1 次調査：鏡山猛 1959など）、「西側」を「弥永原遺跡」として、前者を「集落城」、後者を「墓城」として扱われたこと也有ったが、弥生時代だけであればそれは一定の根拠を有するが（実際には「臼佐原遺跡」にも弥生時代の集落構造も存在する）、各時代にまたがる複合遺跡の名称としては不都合であり、遺構分布も連続的であるので、現在は一括して「弥永原遺跡」という「周知の埋蔵文化財包蔵地」として扱っている。

弥永原遺跡における調査次数は年々増加しており、ここでは既往の主な調査成果について紹介しつつ、遺跡の内容を弥生時代から古墳時代前期の遺構を中心に概観しておきたい。1 次調査（1958 年）は「臼佐原遺跡」の発見の契機となった調査である（鏡山 1959）。福岡女学院建設に伴う造成工事中に、石蓋土壙墓より舶載内行花文鏡が出土したことにより福岡県と九州大学により発掘調査が実施され、丘陵尾根線上を中心に、箱式石棺墓・石蓋土壙墓・甕棺墓からなる弥生時代後期～終末期（註 1）および弥生時代中期の甕棺墓からなる列状の埴輪群が確認された（以下、「〇〇時代」の「時代」を省略）。住宅地造成に伴う遺跡群中央西側の 2 次調査（1961 年）も、ガラス勾玉鑄型の不時発見（1959 年）地周囲で福岡県と九州大学が調査を実施し、弥生後期の陸橋を有する直線的な「濠」の一部が確認された（福岡県埋蔵文化財調査報告書第 32 集）。この調査では不時発見の鑄型と同一個体の可能性のあるガラス勾玉鑄型が弥生後期土器と共に新たに発見された。周囲では、弥生中期から終末期に青銅器・ガラス勾玉鑄造が盛んに行われた証拠が須玖岡本遺跡群で多数発見されているが、その周囲に分布する衛星的な鑄造工房が弥永原遺跡にもあった可能性がある。3 次調査（1966 年）は初めて福岡市が主体となって実施した調査で、南半の A 地区で断面 V 字形の「濠」（2 次と同一溝）、2 次調査と重複する北半の B 地区でも別の直線的な逆台形断面の「濠」が検出された。A 地区濠下半層（褐色土層）はほぼ「弥生中期」の土器が出土とされ（近年の編年の「後期初頭」も含む可能性はある）。また B 地区濠は「弥生後期」土器が主体とされ、時期・断面形の相違と共に、A 地区濠が「防御的」な「環濠」、B 地区濠が断面形や小規模な支水路の溝が取り付く「水路」（排水路）という性格の相違も想定されている（福岡市住宅供給公社・福岡市教育委員会 1967）。4 次調査（福岡市埋蔵文化財調査報告書第 219 集、以下「市報〇集」と略）では、弥生後期の削平された溝や古墳後期の堅穴住居などが検出された。5 次調査（市報 604 集）では、弥生後期の集落の一部や古墳後期～奈良時代の溝が確認された。福岡女学院内の 6 次調査（1 次調査の南東側；市報 830 集）では、弥生中期から後期の甕棺墓・足元掘込土壙墓（木棺墓・石棺墓含む）・石蓋土壙墓などがある埴輪群が確認された。この調査区では弥生後期初頭から中頃の甕棺墓・足元掘込土壙墓・足元掘込石棺墓の変遷が注目される（漢口孝司 2021；註 2）。7 次調査（市報 1133 集）では、丘陵斜面を下りるような方向（東西方向）で、弥生後期後半掘削と想定される溝（濠）が検出された（註 3）。8 次調査（『福岡市埋蔵文化財年報』18、以下「年報」とする）は部分的な調査であったが（調査範



1. 弥永原遺跡 2. 須玖遺跡群（須玖・岡本遺跡群） 3. 評弥郷A遺跡 4. 曰佐遺跡 5. 上曰佐遺跡 6. 高稟遺跡 7. 寺島遺跡 8. 笠抜遺跡 9. 横手遺跡 10. 大橋A遺跡 11. 三宅遺跡群 12. 和田藏池遺跡 13. 三宅B遺跡 14. 三宅C遺跡 15. 和田A遺跡 16. 野多目A遺跡 17. 野多目B遺跡 18. 野多目C遺跡 19. 老司A遺跡 20. 老司B遺跡 21. 老司古墳 22. 老松神社古墳群 23. 那珂遺跡群 24. 五十川遺跡 25. 井尻A遺跡 26. 井尻B遺跡 27. 井尻C遺跡 28. 諸岡A遺跡 29. 諸岡B遺跡 30. 笠原遺跡 31. 三筑遺跡 32. 板付遺跡 33. 高畠遺跡 34. 麦野A遺跡 35. 板付東遺跡 36. 老司瓦窯跡 37. 麦野B遺跡 38. 南八幡遺跡 39. 下大荒遺跡 40. 大荒遺跡 41. 御陵遺跡 42. 野藤遺跡 43. 浦田遺跡 44. 林添遺跡 45. 上ノケ遺跡 46. 弥永原遺跡（春日市）・古野ノ上遺跡 47. 川久保遺跡 48. 川久保B遺跡 49. 下の原遺跡 50. 重久遺跡 51. 古水遺跡 A. 那珂八幡古墳 B. 今宮神社古墳 C. 諸岡2号墳 D. 諸岡3号墳 E. 板付八幡古墳 F. 井尻1号墳 G. 御陵古墳 H. 野藤古墳 I. 弥永原1号墳 (11次)

J. 下白水大塚古墳 K. 卵内尺古墳 L. 老司古墳 M. 老松神社5号墳
※遺跡（周知の埋蔵文化財古墳地）の範囲・形状は厳密ではない。埋蔵文化財課窓口にある遺跡分布地図とは範囲・形状が異なる場合があるので注意されたい。また隣接する春日市域の遺跡分布を含んでいるが、その範囲については春日市発行の発掘調査報告書を参考として作図したが、詳細については春日市に問い合わせされたい。

Fig. 1 弥永原遺跡の位置と周辺遺跡分布図 (1/25,000)

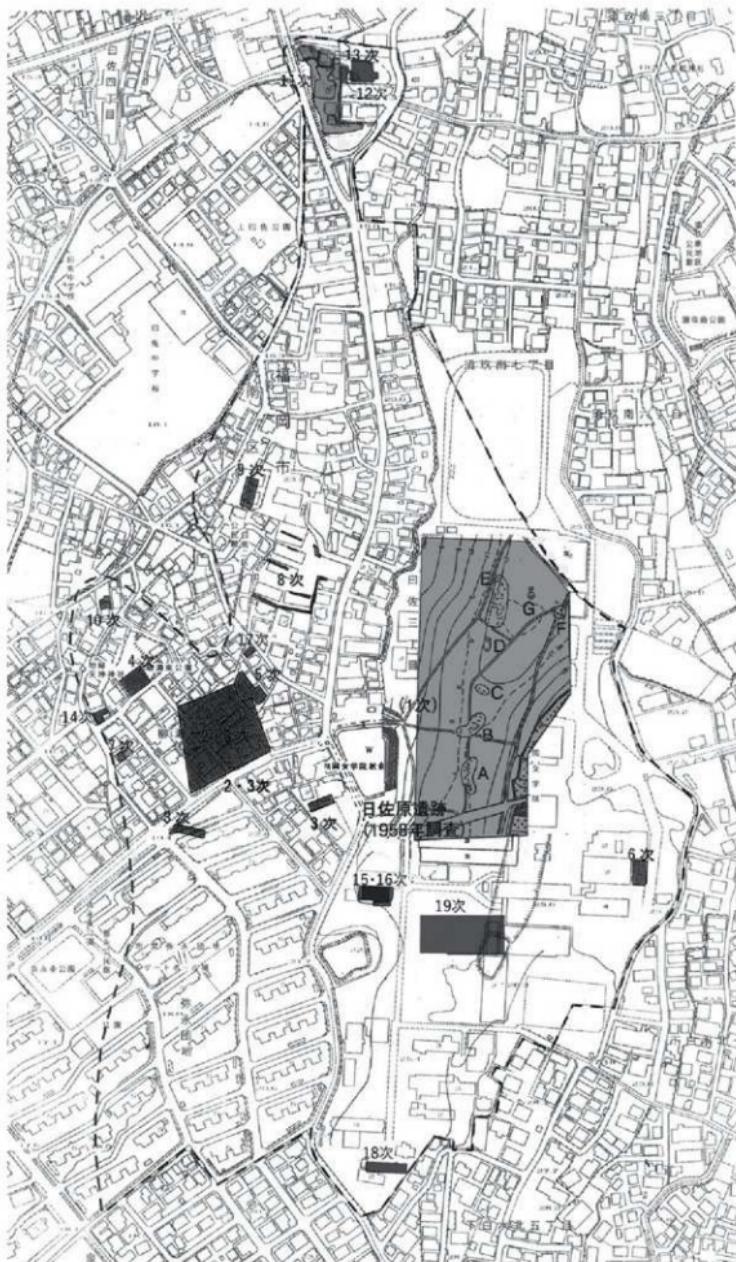


Fig. 2 弥永原遺跡調査地点位置図 (1/4,000) ※一部に旧地形図をはめている。

開の一部は上面確認のみであることに注意)は、弥生中期後半から古墳初頭前の遺構が確認され、弥生終末期の堅穴住居が調査されている。9次調査(市報1014集)は、弥生後期後半から古墳初頭までの堅穴住居3棟と、おそらく弥生後期のベンガラが検出された土壙墓1基がある。10次調査(市報1188集)は、古墳前期前半・古墳後期・飛鳥後期のほぼ同方向で重複する溝群が検出され、またこれらに重複して古墳初頭の方形周溝状区画溝の一部が検出された。ここまで2・3次、4次、7次、10次調査において、弥生中期、弥生後期、古墳前期の「濠」や「溝」が検出されているが(主に弥生後期である)、いずれも直線的な「条溝(条濠)」であり、「環濠(環溝)」ではなく、集落内を縦横に区画するような状況であり、これは比恵・那珂遺跡群の様相(久住猛雄2008)に類似していると予想しておきたい。遺跡北端の11次調査(市報1324集)は、弥生前期後半へ中期初頭の貯蔵穴・土坑群(註3)、弥生中期末?~後期後半?の堅穴住居群、弥生前期の土壙墓群、弥生前期後半(伯玄式)~中期中頃(汲田式)の甕棺墓群、弥生後期?の足元掘込土壙墓(55号)、弥生終末期~古墳前期前半の土壙墓(一部は木棺墓か)・石蓋土壙墓群、および方形周溝墓3基以上と古墳3基?が検出されている(註4)。12・13次調査(市報1378集)は11次調査北半の東側に接し、12次では弥生前期の土壙墓群(註5)と弥生前期後半~末の貯蔵穴群、13次では弥生前期末の貯蔵穴と弥生前期の土壙墓2基(1基は木棺墓か)と弥生中期初頭(金海式古相)の甕棺墓群が検出されている。14次調査(「年報」33)では弥生・古墳時代の遺構は検出されていない。未報告なので詳細は不明だが、福岡女学院構内の15・16次調査(「年報」33・34に概報あり)では、弥生前期~中期の土壙墓・木棺墓群、弥生中期初頭~中期末前後の甕棺墓群と弥生時代鉢削の溝(古墳時代まで機能とする)が検出されている。以上、弥生時代から古墳前期の遺構を主体に概観したものの、古墳中期は3・7次など、その他古墳後期へ飛鳥時代の遺構や遺物が各調査区で若干あるが、奈良時代以降の古代・中世の遺構はかなり少ないという傾向があり、弥永原遺跡の遺跡としての全盛期は弥生時代から古墳時代前期前半で、これは諸岡川を挟んで東側に位置する(Fig.1)須玖岡本遺跡群の動向と密接に連関していると考えてよいだろう。また弥永原遺跡に遺構が少ない時期の周辺地区的な集落動態と変遷に関しては、春日市側も含む周囲遺跡、横手遺跡、臼佐遺跡、寺島・笠抜遺跡、(以下、春日市)御陵遺跡、野藤・浦田遺跡、林添遺跡、古野ノ

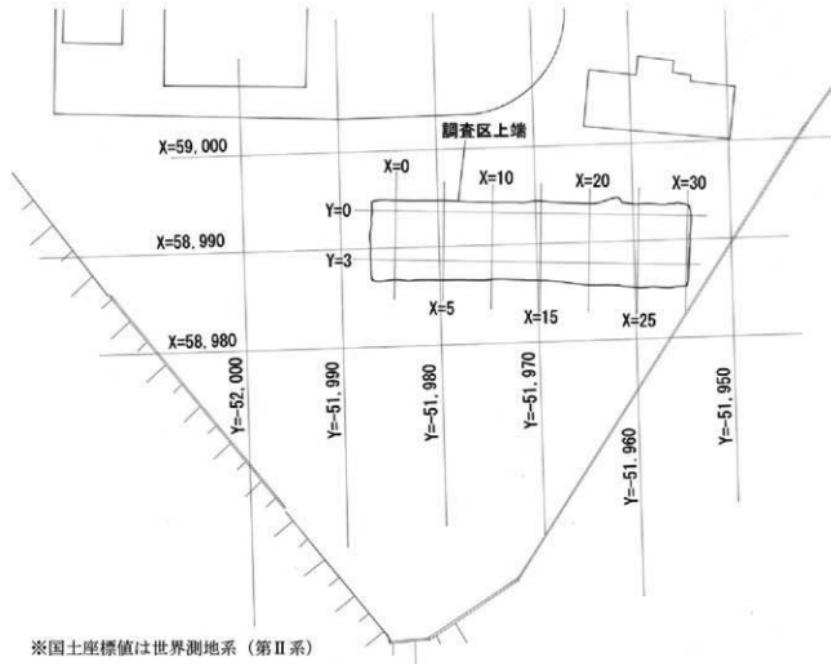


Fig. 3 弥永原遺跡 18 次調査の位置 (1/500)

上遺跡、川久保遺跡、川久保B遺跡、下の原遺跡などでの状況を今後確認して整理する必要があるだろう。またこの地区には、古墳前期初頭の須玖御陵古墳（春日市）を筆頭とし、前後して11次調査の弥永原1号墳（仮称）（註6）、古墳中期後半～末の野藤古墳、古墳後期の下白水大塚古墳という、小規模ながら「首長墓系列」の古墳群があることも注意される。

<引用・参考文献、註記>

桜木義嗣 2007 「弥生時代前期から中期初頭における土器編年の一検討—福岡市域を中心として—」『市史研究ふくおか』第2号 福岡市博物館市史編さん室

鏡山猛 1959 「環濠居住址小論（四）」『史蹟』第78集 九州史学会

久住猛雄 2008 「2弥生聚落の様相 ③福岡平野 比志・那珂遺跡群一列島における最古の「都市」」『弥生時代の考古学8 集落からよむ弥生社会』同成社

福岡市住宅供給公社・福岡市教育委員会 1967 「福岡市弥永原遺跡調査概要」

構口孝司 2021 「福岡県福岡市弥永原遺跡第6次調査地点墓域の研究—北部九州弥生時代IV～V期墓地の一例の社会考古学的検討—」『岩水者三先生追憶記念論文集 持続する想』（上）中国書店

柳田康雄 編 2000 「伯玄社遺跡」春日市文化財調査報告書第35集

1) 今日的な眼で見ると、「佐原遺跡」の箱式石棺墓などには、鐵鍔や玉類から古墳前期に下るもののが含まれている可能性がある。

2) 溝口 2021において、弥永原 6次の斐哲墓K007とK101を「KIV b/c」式（弥生後期前業）とするのはよいが、胸部内面へのハケメ施行の顕在化や、後期初頭のそれよりは元掘込がやや浅くなった元掘込土壙墓SB025・028（准後期前業）を切る斐哲墓K020は「K IV b/c」式ではありえず、後期中墓には下る型式である。

3) 11次調査の貯蔵穴と弥生時代土坑の大半は弥生後期後半～末（板付II b～II c式）であるが、7号井戸穴と10号土坑は小型壺の型式などから「中期初頭（古相）」（桜木義嗣 2007 の「②式」新相に相当）による可能性が高い。

4) 11次調査の主担当者「報告者」と、調査に関わった複数の文化財専門職員との間で現場所見の若干の見解の相違があった。たとえば報告では「SD-03」とする古墳は単獨の円墳とされているが、報告Fig. 72 で位置だけが示されている「SD-04」と合わせて前方後円墳ないし前方後方墳ではないかとする指摘がある。

実際に埴生遺跡測量図（報告書未掲載）、地形変換線を入れた図ではそのように見え、また「前方部」の可能性がある「SD-04」部分には、表土下に溝・土壙層らしきものがあつたことを何人かの職員が確認しており、その下部から弥生時代の貯蔵穴や埴墓を検出できた状態であった。もし前方後円（方）墳であった場合、「20号方形周溝墓」の南側と埴墓を共有し、全長約28m前後にあつた可能性があり、時期は20号方形周溝墓と同じ古墳初頭であろう。「SD-03」の主体部についてもやや疑問が残る。また「弥生時代」として報告されている土壙層・石壙土壙墓群のうち、方形周溝墓群（「SD-03」）の成立を築造契機とする（墓群と考えられる）の周溝との位置関係や周溝内埋葬であるものや、粘土目張りがある本格墓と考えられるものの（20号方形周溝墓や古墳「SD-40」）中央主体がそのような木棺墓である。また古墳前期の然ななる鉄器副葬品のあるもの（30・31号、71号土壙墓）などは、古墳初頭以降古墳前期半になるものと考えられる。具体的には、17・20・21・30・31・33・34・40・50・65・66・69・71号土壙墓がその可能性がある。また49号土壙墓（木棺墓）は、弥生終末期であろう。さらに「SD-40」は円墳と報告されるが、「30号」溝状遺構と28号墳からなる小型方墳（方形周溝墓）の可能性があるほか、「1号」溝と20号方形周溝墓西端に区画された空間（「33・34号土壙墓がある」）や、主体部は未検出であるが（削平か）、116号溝と63号方形周溝墓北側と「SD-03」南端に区画された空間も「方形周溝墓」であった可能性が残る。以上は弥永原遺跡の埴墓変遷の理解のためあてて記したが、これらについていはずれ記録類や出土遺物を精査して再考したい。

5) 12次調査の土壙墓（一部は木棺墓）群と11次調査12・21号土壙墓からなる範囲は、土壙墓方位の規則性や、地形的位置、その他の出土状況などから「区画墓」の可能性がある。類似として、春日市伯玄社遺跡丘陵頂部木棺墓群がある（柳田康雄編 2003）。
6) 註2参照。11次調査の「SD-03」と「SD-04」を合わせて前方後円（方）墳とした場合の解釈。

II. 調査の記録

1. 調査地点の位置と基本土層

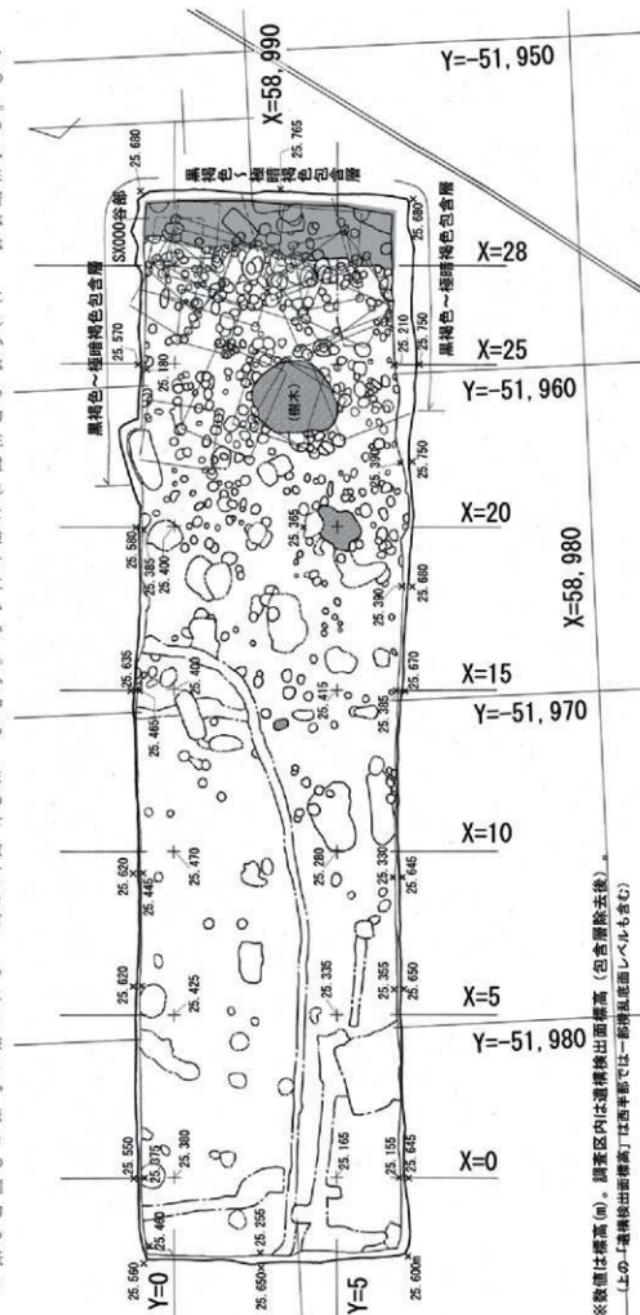
弥永原遺跡第18次調査地点（以下、「弥永原18次」または単に「18次」とする）は、弥永原遺跡の立地する丘陵のほぼ南端付近に位置している（Fig. 2・3）。この地点の現在の標高は、25.6m～25.7m前後でほぼ平坦になっているが、およそ南北に延びる丘陵尾根が本来来ていたとみられる調査区西半は、旧地形では約27～28m前後であり、おそらく福岡女学院の学校建設に伴う造成工事によりかなりの削平を受けたとみられる。遺構の分布も調査区西半は非常に薄く、逆に若干の谷部（丘陵鞍部）が入るとみられる東側は遺構が多く遺存し「落込みSX000」はその谷頭地形の一部とみられる）、二次的な堆積であるが、遺構検出面とした地山ローム土上面の上部に極暗褐色～暗褐色の包含層（遺物を含むが、遺物量は少ない）が形成されていた（Fig. 8・9、卷頭図版1-3・4）。遺構検出面は、調査区西半では表土（耕作土なし／近年の盛土層）を除去したGL（ここではその地点ごとの調査時現況レベルを指す）-10～-30cmの標高25.25～25.50m前後の鳥栖ローム上面とした。調査区中央から西側に向かって遺構検出面は傾斜して低くなり、調査区中央（調査区任意座標X=15前後）で標高25.40m前後、東半中央（X=20～25）で標高25.40～25.20m前後の鳥栖ローム上面となり（X=22付近から東は前述の包含層が鳥栖ローム上面を覆っている）、調査区東端手前（X=28前後）からは、「包含層」が東に落込み、その途中の面（SX000検出上面）で遺構が検出できることを確認したので、調査区東端については北側で標高25.00m前後（Fig. 9、Fig. 17左参照）、南側で24.55～24.60m前後（Fig. 17右参照）の極暗褐色土層（SX000上層）を遺構検出面としている（註7）。なお、「周辺の地理的歴史的環境と弥永原遺跡のこれまでの調査」で見たように東側には深い谷部（丘陵鞍部）が入るが、東側の川久保B遺跡（春日市）と接していて（Fig. 1）、さらに18次東側の遺構分布は濃密であるので遺構分布が連続する可能性を考えるべきであろう。

7) 本調査における土層（土層図注記説明）の土色標記の基本は『新版標準色色鉆』（農林水産省農林水産技術会事務局・財團法人日本色彩研究所監修）に準拠したが、一部特徴的な土色は若干異なる表現を用いた場合がある。

2. 調査の概要

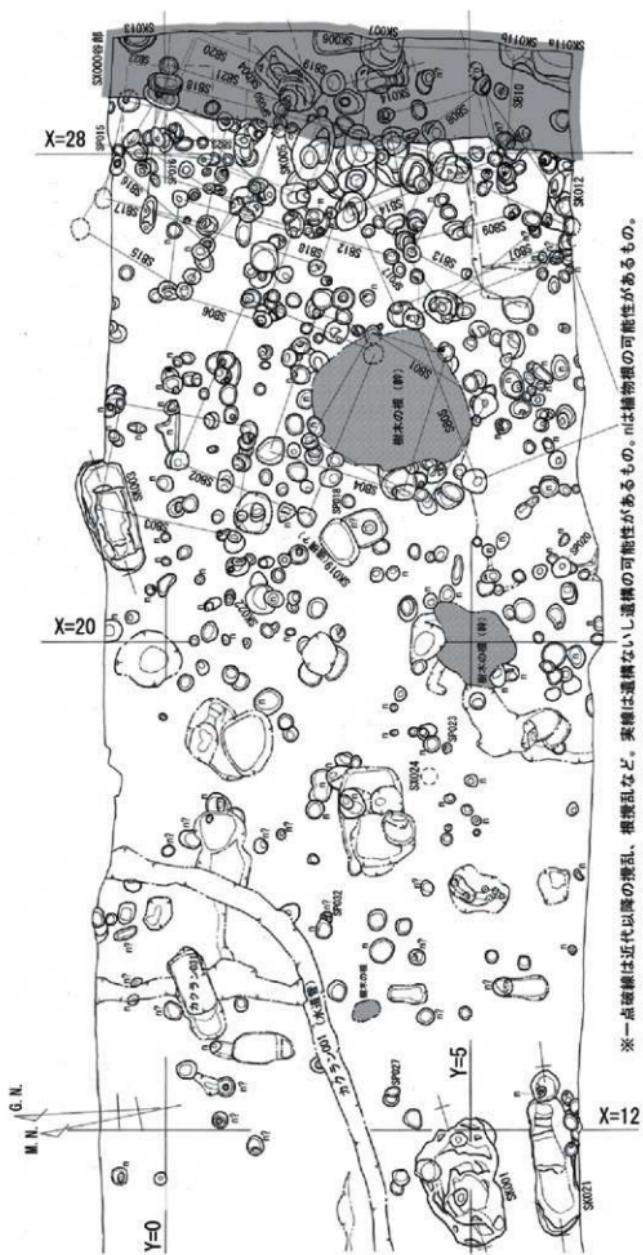
弥永原18次での遺構の検出は、主に調査区の東半分で認められた。多くは中小のピット群であり、並びそ

うなものがあり、柱穴を含むと考えられる。その他、土坑を8基検出した。土坑の中には、木棺墓の可能性があるものが1基、足元掘込土壙墓の可能性があるものが2基、土壙墓の可能性があるものが1基、焼土坑の可能性があるものが1基であった。残りの3基は性格不明土坑である。ただし、「れ」の遺構も出土遺物が無いか僅少で、遺構の時期が不明なものが大部分であるが、わずかな出土遺物や覆土の色や質から弥生時代～古墳時代前期の遺構が含まれると考えられる。なお「S（土坑）」とした中には、その後の検討の結果、掘立柱建物を構成すると考える柱穴にすべき遺構も含まれているが、「SK」表記は現場での記録のまま残している。また多数検出された中小のビットについては、中には植物根の疑いがあるものの含まれていたが、まず明らかに覆土のしまりが甘いものや、覆土の土色が淡い色のもの、下部が根の作用で凹凸が激しかったり枝分かれして細く下部に入り込むような状況ものは植物根の可能性が高いものとして、「遺構」から除外している（Fig. 5～7で「n」としたものはそのようなビットである）。さらに、遺構検出時には全てのビット上面の遺構覆土の土色や質についてメモ記録を残し、後に検証できるようしている。また覆土の土色ごとの色分け分布図も作成して、掘立柱建物の図上復元の根拠の一つとしたが（本報告では紙幅の都合から提示できな



※数値は標高(m)。調査区内は遺構検出面標高（包含層除去後）
——上の「遺構検出面標高」は西半部では一部地盤乱れ面レベルも含む

Fig. 4 弥永原遺跡18次調査区全体図 (1/150)



※一点ずつ標は近以降の擾乱、根茎乱など。案書きは遺構ないし遺構の可能性があるもの。nは植物根の可能性があるもの。

Fig. 5 弥永原遺跡 18 次調査区中央～東半部遺構分布図 (1/80)

かったが記録類は収蔵される予定である)、図上復元した掘立柱建物実測図 (Fig. 18~27) の柱穴には、各柱穴の検出時の土色を記している。ピットにおいて、比較的しまりがある覆土で、暗褐色ないしそれより暗い土色(柳暗褐色～黒褐色)のものについては、基本的には柱穴の可能性があるとしたが、暗い色の覆土は元々は当時の表土の有機質土壤に起源すると考えられ、後の植物根も込んでそのような土質のところに入り込んでいくことがあるとも考えられるので、多少の「根の影響」があつても、上記のような土色と性質のあるピットは柱穴ないし遺構と判断している。

掘立柱建物は、前述のピットの土色分布と矩形の組合せになること、ピットの深度の類似性(ただし東側落込み側の柱穴底面は低くなる場合多いが、これは斜面に建物を構築する際にには必然的にそうなるからである)から、可能性も含めて 25 棟を復元し、そのうち 23 棟分を図示している。

今後、遺跡の縁辺部であっても、ピット群が存在する場合には、安易に「植物生根」と判断せず、柱穴群の可能性を現場で判断すべきと考える。なおこのような遺跡縁辺部ないし遺跡内の谷状鞍部において柱穴群と考えられるピット群が検出された例として、南八幡遺跡第 17 次調査がある(市報 1171 集)。南八幡 17 次においても現場でピット群の土色・土質を精査することにより、柱穴の可能

性があるピットを選別した上で掘立柱建物を推定復元している。

また出土遺物は、全体に非常に少なく、パンケース1箱分の土器片（弥生土器、須恵器、土師器、中世瓦質土器、近世土師質土製品、近世肥前系陶磁器）などが出土している。また墳墓の可能性がある土壙（SK001）からは赤色顔料の可能性がある赤色粒子を少量検出しておらず、福岡市埋蔵文化財センターでの分析の結果、ベンガラである可能性が高いことが判明している。出土遺物が僅少であるのは、一つには削平が顕著であることと、遺跡（特に弥生時代～古墳時代前期の集落）の縁辺部であることによると考えられる。

3. 検出遺構

遺構分布図は、全体図をFig.4、中央～東部をFig.5、西半部をFig.6、また東端の遺構密集区について縮尺を拡大して別にFig.7を提示した。最後のFig.7については、Fig.5に描いた遺構の切り合い関係と逆に、切られた遺構の検出状況を優先的に表現した部分があり、また東端部の落込みSX000の上層で検出した遺構（これらはFig.5に描いた）を除去した後に、SX000掘削途中ないしSX000底面で検出した遺構を表現している。また遺構の分布状況については写真図版（裏表紙写真、巻頭図版1-1・

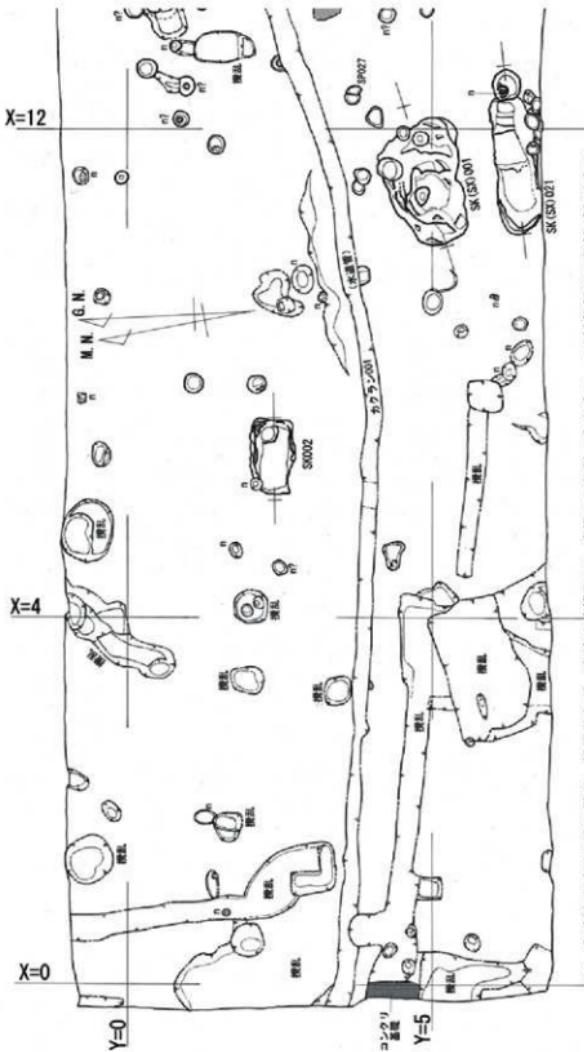
2、P.L. 1-1）を、さらに調査区東側の遺構密集状況についても写真図版の詳細写真（巻頭図版2、P.L. 1-2～6、P.L. 2、P.L. 3-1～3）も参照していただきたい。

以下、土坑・土壙墓（SK, SX）、落込み遺構（SX）、掘立柱建物（SB）の順に報告する。

（1）土坑・土壙墓など（SK, SX）

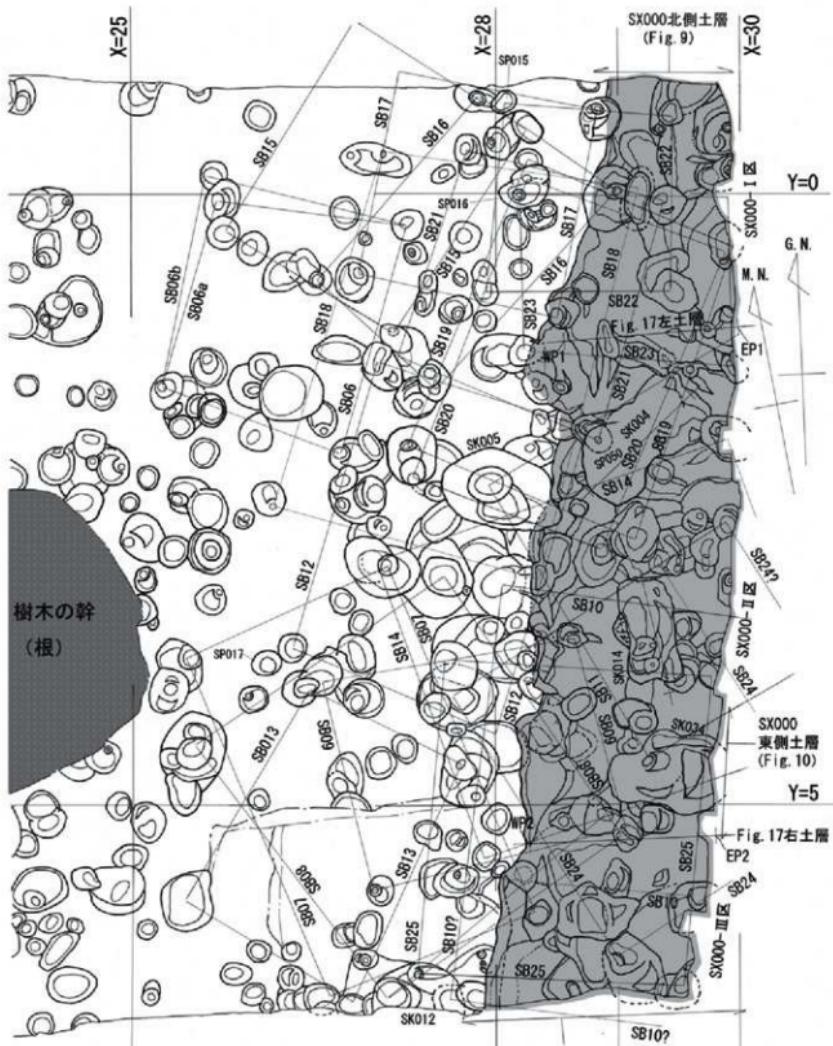
・SK001 (Fig.11、巻頭図版3-2～8、P.L. 3-4・5、表4-6)

調査区中央やや西側（任意座標X=11付近）で検出した土坑。やや不整形気味だが、西側約80 cm幅、東側約140 cm幅、長さ約200 cm前後の台形状の平面形をなす。横断面および縦断面とともに逆台形状だが、北側と東側は一部段状となる。検出面からの深さは80～85 cm。長軸方位はN=73°-E。検出上面の土色は黒褐色ないし



※一点破線は近代以降の機械、根籠など。実線は遺構ないし遺跡の可能性のあるもの。nは植物根の可能性があるもの。

Fig. 6 弥永原遺跡 18次調査区西半部遺構分布図 (1/80)



(図の表現で、Fig. 5で描いた遺構の下部にあった

遺構を本図では優先的に描いていることに注意) 遺構

※アミかけ部はSX000谷部(落込み)遺構

Fig. 7 弥永原 18 次調査区東側 (X=24 以東) 遺構分布図 (東縁は SX000 下部遺構) (1/40)

黒褐色に近い極暗褐色で、全体的にしまりがある覆土である（詳細は Fig. 11 の土層図と表 4~6 の土層説明参照）。規模、平面形、覆土から、弥生時代の土壙墓ないし木棺墓になる可能性を考え四分割して掘削・調査したが、少なくとも明確な木棺痕跡は無く、また出土遺物も無いので性格は不明な土坑である。ただし覆土の土色や質は周辺の弥生時代遺構のそれに近い。また縦断土層 (Fig. 11 土層③-①) を見ると、東側壁際の 18 層が垂直に近く立っており、この層と西側に何か境界させるもの（板など）があった可能性もあること、いわゆるかの端側ではないが、中央やや西側が掘りくぼめられていることなどを考えると、やや特異であるが、弥生時代

後期初頭前後の「足元掘込土壙墓」の未定型式などに該当する可能性もある。ただし典型的ではなく、あくまで一つの可能性としておく。また先に「板」が存在した可能性も指摘したが、この部分の下面是ピット状に回んでいて、その想定は当たらないかも知れない。その他、縦文時代の「陥し穴」なども可能性としては考えられるが、陥し穴に特有な垂直ないし下側がオーバーハングするような壁面ではないこと、下部に杭を打ち込んだような形跡はないこと、また陥し穴であれば、センターに沿って列状に並ぶことが多いが、他に同様の遺構が認められないことなどから、その可能性は低いとみておく。また、断面形状的には貯蔵室でもなく、戸戸の可能性も湧水レベルまで掘削されていないので、それもない。結論的には、未定型の「足元掘込土壙墓」の可能性を残しつつ、性格不明土坑としておく。ただし削平が大きいと考えられる位置に掘削されているので、少なくともあと 1m 前後の深度があった遺構であることを考慮する必要がある。

・ SK002 (Fig. 12、表表紙写真、巻頭図版 3-9・10、P.L. 3-6 ~11、表 7)

SK001 と同様に、削平度が大きい調査区西半の、任意座標 X=7 前後で検出した。やや歪みはあるものの、ほぼ長方形としてよい平面形で検出したので、土壙墓ないし木棺墓の可能性を考えて掘削・調査したが、幅が狭いため四分割法はできなかつた。東側約 68 cm 幅、西側側約 50 cm 幅、長さ約 124 cm 前後のやや台形気味の略長方形平面をなす。横断面および縦断面とともに、壁面は垂直に近く、長辺南壁の一部はややオーバーハングしているが、下層ではややすぼまる。

底面は平坦に近いが、底面中央付近で一見「小ピット」状の穴複数を検出したことと（後述）、底面北東と東西部分ではわずかに凹みがあるという状況がある。検出面からの深さは 55~63 cm。長軸方位は N=70°~W であ

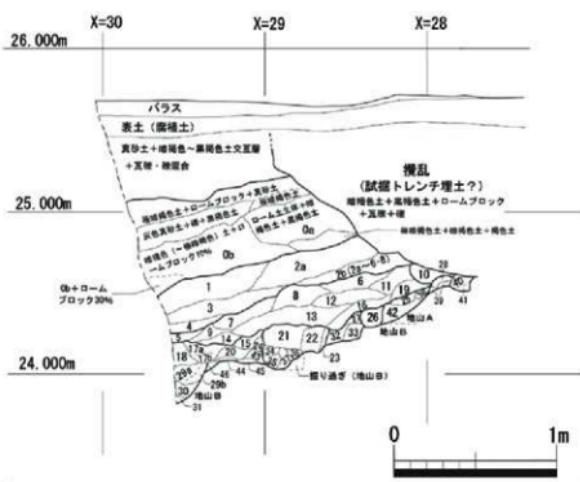


Fig. 8 調査区東端南面土層(X=28~30) (1/30)

1. 植被褐色土 (暗褐色土氣味) + 黒褐色～55% 暗褐色～ローム粒子 5% + 砂粒 1~2%。根の影響あり、しまりややせい。0~2 層より暗い。
2. 植被褐色土 (1.より暗い) + 暗褐色土 30% + 暗褐色土～ロームブロック 10% + 地山 A 5% + 地山 B 5% + 砂質・礫混合 5% + 砂粒 2%。全体的に層より暗い。しまりややせい。
3. 植被褐色土 (暗褐色土氣味) + 暗褐色～55% 暗褐色～ローム粒子 2% + 砂粒 2%。しまりややせい。
4. 植被褐色土 + 地山 A 5% + 地山 B 5% + 砂質・礫混合 5% + 砂粒 2%。しまりややせい。
5. 暗褐色～55% 暗褐色土 + 暗褐色土 30% + ローム粒子 1%。しまりややせい。
6. (やや明るい) 暗褐色土 + 暗褐色土 30% + 暗褐色土 10%。しまりややせい。
7. に55% 暗褐色土 + 暗褐色土 30% + ロームブロック 5% + 砂粒 5%。しまりややせい。
8. (やや明るい) 暗褐色土 + 暗褐色土 15% + ローム粒子 5% + 砂質・礫混合 5%。しまりややせい。
9. 暗褐色土 + 暗褐色土 10% + ローム粒子 5% + 砂質・礫混合 5%。しまりややせい。
10. 暗褐色土 + 暗褐色土 30% + に55% 暗褐色土 10%。しまりややせい。
11. 暗褐色土 + 暗褐色土 に55% 暗褐色土 10% + ローム粒子 5%。しまりややせい。
12. 暗褐色土 + 暗褐色土 10% + ローム粒子 5% + 砂質・礫混合 5%。しまりややせい。
13. 暗褐色土 + 暗褐色土 10% + ローム粒子 5% + 砂質・礫混合 5%。しまりややせい。
14. 植被褐色土 (暗褐色土氣味) + 暗褐色土 30% + 砂質・礫混合 10% + 砂粒 5% + ローム粒子 1%。しまりややせい。
15. 13. + 17. 層より黒。
16. 植被褐色土 + 暗褐色土 + 地山 A/B ブロック 10%。しまりややせい。
17. 16. 層より明るい混合土粒 5% + 地山 A/B 層 (ピット)。
18. 植被褐色土 + 暗褐色土 15% + 砂質・礫混合 5% + ローム粒子 1%。しまりややせい。
19. 暗褐色土 + 暗褐色土 10% + ローム粒子 5% + 砂質・礫混合 5%。しまりややせい。
20. 暗褐色土 + 暗褐色土 25% + に55% 暗褐色土 + ローム粒子 5% + 砂質・礫混合 5%。しまりややせい。
21. 植被褐色土 + 黒褐色土 10% + 暗褐色土 10% + 地山 A/B ブロック 5%。しまりややせい。
22. に55% 暗褐色～暗黃褐色土 + 暗褐色土 10% + ローム粒子 10% + 地山 A/B ブロック 30%。しまりややせい。
23. 植被褐色土 + 黑褐色土 25% + 暗褐色土 10% + 地山 A/B ブロック 5%。しまりややせい。
24. 植被褐色土 + 黑褐色土 25% + 暗褐色土 10% + 地山 A/B ブロック 5%。しまりややせい (23.と24.はピット)。
25. 植被褐色土 + 地山 B 黃褐色土 + 白色ブロック 60%。しまりややせい。
26. 植被褐色土 + 黑褐色土 10% + 暗褐色土 + 地山 A/B ブロック 5%。しまりややせい。
27. に55% 黄褐色土 + 黑褐色土 15% + 地山 B ブロック 25%。しまりややせい。
28. に55% 黄褐色～(暗褐色) 黑褐色土 30% + 暗褐色土 30% + 植被褐色土 5% + 砂質・礫混合 5%。しまりややせい。
29. に55% 黑褐色土 + 黑褐色土 10% + 暗褐色土 10% + ローム粒子 5% + 砂質・礫混合 5%。しまりややせい。
30. 植被褐色土 + 暗褐色土 10% + 地山 B 砂質ブロック 5~7%。しまりややせい。
31. に55% 黄褐色土 + 暗褐色土 30% + 暗褐色土 30% + 地山 B 砂質ブロック 20%。しまりややせい。
32. 植被褐色土 + 黑褐色土 10% + 暗褐色土 10% + ローム粒子 5% + 砂質・礫混合 5%。しまりややせい。
33. 地山 B 黄褐色土 + 黑褐色土 30%。しまりややせい。
34. 植被褐色土 + 暗褐色土 20% + 地山 B 砂質 10%。しまりややせい。
35. 植被褐色土 + 黑褐色土 10% + 黄褐色土 + 黄褐色土 15%。しまりややせい。
36. 暗褐色土 + 黑褐色土 10% + 黄褐色土 (に55% 黄褐色) 15%。しまりややせい。
37. 暗褐色土 + 黑褐色土 10% + 黄褐色土 15%。しまりややせい。
38. 暗褐色土 + 黑褐色土 15%。しまりややや。
39. に55% 黄褐色土 + 黑褐色土 10%。しまりややや。あるいは地山 B 剥離層。
40. 暗褐色土 + 暗褐色土 15% + に55% 黄褐色土 + ローム粒子 3%。しまりややや。
41. に55% 黄褐色土 + 黑褐色土 15%。しまりややや。
42. 地山 B 黄褐色土 + 黑褐色土 20%。しまりややや。
43. 暗褐色土 + 黑褐色土 10% + 黄褐色土 10%。しまりややや。
44. 暗褐色土 + 黑褐色土 40~50%。しまりややや。
45. 地山 B 黄褐色土 + 黑褐色土 10% + ローム粒子 5% + 暗褐色土 3%。しまりややや。
46. 黑褐色土 15%。しまりやや。
47. 黄褐色土 (やや砂質土) + 黑褐色土 10% + 地山 B 黄褐色土 + 黑褐色土 (トスロームの堆積質)。しまりやや。

表 1. 調査区東端南面土層(Fig. 8) 説明

が、東西端の両小口側にも小口板痕跡が検出された (Fig. 15 中央、巻頭図版 3-10)。その側板・小口板痕跡の検出状況写真を撮影した後に、おおむね黒褐色の板痕跡部分を掘削して、そこで再度記録を残した (P.L. 3-8・9)。その上で、残りの覆土 (埋土) を除去し、底面まで掘削した。底面上りや上部の埋土から、赤色粒子を検出したので、調査時はまだ未分析であったが、赤色顔料 (ベンガラ) の可能性が高いと判断されたので、この SK002 土坑は、組合板式の木棺墓の可能性が高いと解釈した。小口板のみであるが縦断土層でもそれに対応する土層を確認している。また土層の検討からは、底面よりわずかに上面で平坦な土層ラインが認められるので、底板が



Fig. 1 弥永原 18 次調査風景（調査区東端部遺構検出状況：南東から）

あった可能性も考えることになった。しかしながら底面まで掘削すると、先述のように中央付近にいくつかの「小ピット状」の穴が認められた (P.L. 3-10・11)。ここで、これら小ピットが「杭」痕跡で、「陥し穴」である可能性も浮上したが、慎重に掘削した結果、これらの覆土はいずれも非常にしまりが甘く覆土全体が比較的よくしまっていたとのは好対照であること、また縦断土層の検討でも、上部から延びてくる明確なラインは見えないものの、いくつか植物根の影響がある層が認められることから、結果的に中央部に植物根の先端が後に集まつたものと判断したい。また「陥し穴」である場合、やはり列状に分布が認められることが普通であるはずだが、それは認められず、また途中で検出し、土層でも検証できた壁面周囲の板痕跡は間違いないと思われる所以、「陥し穴」にはそのような形式の遺構はほぼないと考えられ、やはり木棺墓である可能性が高いとして報告する。なお当初よりこの遺構は墳墓である可能性があると考え調査したため、覆土は全て他の遺構の掘削廃土とは別にして、調査中に掘削土を細かく碎いて玉類など微細な遺物がないか精査した (全てはできていなかつたが半分程度は精査した)。その結果は、赤色粒子がわずかに検出できたのみで、他に出土遺物は認められなかつた。そのため遺構の正確な時期は不明である。しかし出土した微量の赤色粒子 (巻頭図版 4-13~15) を調査後に埋蔵文化財センターの分析機器 (蛍光 X 線装置) で分析したところ、鉄 (Fe) 元素が強く検出され、酸化第二鉄 (ベンガラ) の可能性が高いとの所見を得た。この結果により、SK002 は墳墓 (木棺墓) である可能性が

SK001 土層①・②

1. (にこり) 黄褐色ローム崩落土。しまり甘い。粘性あり。
2. 埋れ・黒褐色土。 (にこり) 黑褐色ロームブロック 30%。しまりやや。粘性あり。
3. (にこり) 黄褐色ローム崩落土。しまりやや。粘性あり。
4. (にこり) 黄褐色ローム土±30%。しまりやや。粘性やや。
5. 墓頂黒色 (-黒褐色) 土±ローム粒子少々。しまり甘い。
6. (にこり) 黑褐色土。 (にこり) 黑褐色ローム±30%。しまり甘い。粘性やや。
7. 植縫黒色土±ローム粒子。小ブロック 5%。しまりやや。
8. 埋れ・黒褐色土±30%。しまりやや。
9. 黄褐色 (-黒褐色) 土±10%。しまりやや。粘性やや。
10. (にこり) 黄褐色ローム±30%。しまり甘い。粘性やや。
11. 黄褐色ローム土±黒褐色±暗褐色土。しまりやや。粘性やや。
12. (にこり) 黑褐色土±30%。しまりやや。粘性やや。
13. 埋れ・黒褐色土±30%。しまりやや。粘性やや。
14. 黄褐色ローム土±黒褐色±暗褐色土。しまりやや。粘性やや。
15. 黑褐色土±30%。しまりやや。
16. 埋れ・黒褐色土±30%。しまりやや。

17. 埋め跡へ暗褐色土。にぶい黒褐色土 30% (にこり) ローム黄褐色土
18. 黑褐色土±30%。しまりやや。
19. 黄褐色土±30%。しまりやや。
20. 黄褐色土±30%。しまりやや。
21. 黄褐色土±30%。しまりやや。
22. 黄褐色土±30%。しまりやや。
23. 黄褐色土±30%。しまりやや。
24. 黄褐色土±30%。しまりやや。
25. 黄褐色土±30%。しまりやや。
26. 黄褐色土±30%。しまりやや。
27. 黄褐色土±30%。しまりやや。
28. 黄褐色土±30%。しまりやや。
29. 黄褐色土±30%。しまりやや。
30. 黄褐色土±30%。しまりやや。
31. 黄褐色土±30%。しまりやや。
32. 黄褐色土±30%。しまりやや。
33. 黄褐色土±30%。しまりやや。
34. 黑褐色土±30%。しまりやや。
35. 黄褐色土±30%。しまりやや。
36. 黄褐色土±30%。しまりやや。
37. 黄褐色土±30%。しまりやや。
38. 黄褐色土±30%。しまりやや。
39. 黄褐色土±30%。しまりやや。
40. 黄褐色土±30%。しまりやや。
41. 黑褐色±30%。しまりやや。
42. 黑褐色±30%。しまりやや。
43. 黑褐色±30%。しまりやや。
44. 黑褐色±30%。しまりやや。
45. 黑褐色±30%。しまりやや。
46. 黑褐色±30%。しまりやや。
47. 黑褐色±30%。しまりやや。
48. 黑褐色±30%。しまりやや。
49. 黑褐色±30%。しまりやや。
50. 黑褐色±30%。しまりやや。
51. 黑褐色±30%。しまりやや。
52. 黑褐色±30%。しまりやや。
53. 黑褐色±30%。しまりやや。
54. 黑褐色±30%。しまりやや。
55. 黑褐色±30%。しまりやや。
56. 黑褐色±30%。しまりやや。
57. 黑褐色±30%。しまりやや。
58. 黑褐色±30%。しまりやや。

表 4. SK001 土層 (Fig. 11 土層①・②) 説明 (1)

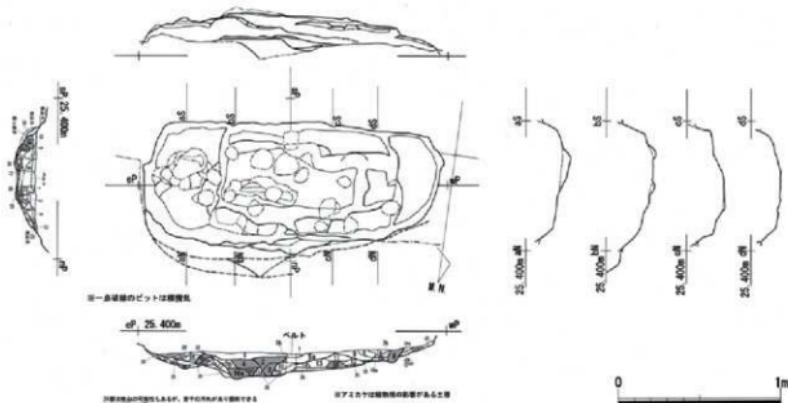


Fig. 13 SK003 実測図・土層図 (1/30)

SK003 東西土層

1. (黒褐色土+暗褐色土+暗褐色土+暗褐色土) +ローム粒子 5% +ドーム粒子 +小ブロック 2%, しまりややありへやや甘い。
2. 暗褐色土+暗褐色土 20% +ローム粒子 3%, しまりやや甘いへやや甘い。
3. 暗褐色土+暗褐色土 30% +ローム粒子 20% +ドーム粒子 20%, しまりやや甘いへやや甘い。
4. 暗褐色土+ロームにぶい樹色へにぶい樹色 20%, しまりややあり。
- 5a. (黒褐色土) 暗褐色土+暗褐色土+ローム粒子 20% +ロームにぶい樹色へにぶい樹色土 10%, しまりややあり。
- 5b. (暗褐色土) 暗褐色土+暗褐色土+ローム粒子 30% +ロームにぶい樹色へにぶい樹色土 20%, しまりやや甘い。
6. 樹色土 (樹色土) 土上にぶい樹色へにぶい樹色 20%, しまりやや甘い、根カクランか。
- 7a. 黒褐色土+暗褐色土+ローム粒子 2%, 根の影響が多くなり甘い。
- 7b. 黑褐色土+暗褐色土+ローム粒子 10%, 根の影響がありしまり甘い。

8. 暗褐色土 + (樹色へにぶい樹色土) +ローム粒子 5%, しまりややあり。
9. 黒褐色土+暗褐色土+ローム粒子 2%, しまりややあり。
10. 暗褐色土にぶい樹色 +ローム粒子 10%, 樹の影響 (根巣?) がありしりや甘い。
11. 暗褐色土+暗褐色土 15% +ローム粒子 12%, しまりやや甘い。
12. 暗褐色土+暗褐色土 15% +にぶい樹色へにぶい樹色ローム土 3%, しまりやや甘い。
13. 暗褐色土+暗褐色土 25% +にぶい樹色土 +ローム粒子 7%, 樹の影響がありしりや甘い。
14. (ぶい樹色土) +ぶい樹色ローム土 30% +暗褐色土 5%, しまりややあり。
- 15a. 褐色土+ローム土+暗褐色土 5%, しまりややあり。
- 15b. 褐色土+ローム土+暗褐色土 5%, しまりやや甘い。
- 16a. にぶい樹色へ暗褐色土+樹色ローム土 25%, しまりややあり。
- 16b. 樹色土 (暗褐色土) 土上にぶい樹色ローム土 25%, しまりやや甘い。
17. 樹色土+暗褐色土 (16 層より) +ローム粒子 +土粒子 5%, しまりやや甘い。
18. 單色土 (23 層より) +ローム粒子 3%, しまりやや甘い。
19. 單色土 (23 層より) +ローム粒子 3%, しまりやや甘い。
- 19a. 稲作ローム土+暗褐色土 30%, しまりややあり。
- 19b. 稲作ローム土+樹色土 10%, しまりややあり。
- 19c. 稲作ローム土+暗褐色土 10%, しまりややあり、粘性あり。
- 20a. 暗褐色土+にぶい樹色ローム土 25%, しまりやや甘い。
- 20b. 21a. にぶい樹色ローム土+暗褐色土+暗褐色土 10%, しまりやや甘い。
- 21b. 21c. にぶい樹色ローム土+暗褐色土 10%, しまりやや甘い。
22. 暗褐色土 (17~26 層より) +ローム粒子 5%, しまりやや甘い。
23. 暗褐色土 30% +にぶい樹色へにぶい樹色ローム土主体, しまりやや甘い。
- (29 層以下は表 9 参照)

表 8. SK003 東西土層(Fig. 13 eP-wP) 説明 (1)

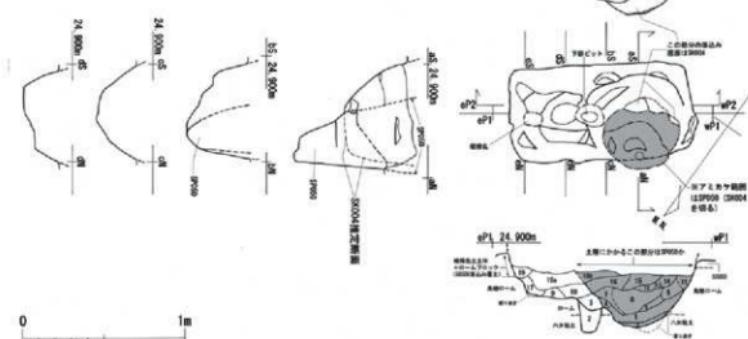


Fig. 14 SK004 実測図・土層図 (1/30)

(一) 8 結合)

- SK002 東西南土層 (2)**
 1. 植物根跡土+暗褐色土 25% + ローム粒子 3%。しまりやや甘い。東西南土層
 2. 植物根跡土+暗褐色土 30%。しまりやや甘い。
 3. にぶい 暗褐色土+暗褐色土 10%。しまりやや甘い。(根の影響)
 4. 植物根跡土+暗褐色土 20% + ローム粒子 3%。しまりやや甘いやや
 5. 植物根跡土+暗褐色土 20% + ローム粒子 5%。しまりやや甘い。
 6. 植物根跡土+暗褐色土 10%。ローム粒子 2%。しまりやや甘い。
 7. 植物根跡土+暗褐色土 20% + ローム粒子 15%。しまりやや甘い。
 8. 植物根跡土+暗褐色土 30% + ローム粒子 5%。しまりやや甘い。
 9. にぶい 暗褐色土+暗褐色土 10%。しまりやや甘い。

SK003 南北土層

1. 黒泥~暗褐色土土 (暗褐色土 5%、ローム粒子 5%。しまり甘い。根の影響あり。東西上層 1 層
 2. にぶい 暗褐色土 5%。しまりやや甘い。

2. 暗褐色土土+暗褐色土 20% + ローム粒子 3%。しまりやや甘い。東西南土層
 3. 暗褐色土土+暗褐色土 30%。しまりやや甘い。
 4. にぶい 暗褐色土+暗褐色土 10%。しまりやや甘い。(根の影響)
 5. 暗褐色土土+暗褐色土 20% + ローム粒子 5%。しまりやや甘い。根の影響あり。
 6. 暗褐色土土+暗褐色土 10%。しまりやや甘い。
 7. 暗褐色土土+暗褐色土 20% + ローム粒子 15%。しまりやや甘い。
 8. 暗褐色土土+暗褐色土 30% + ローム粒子 5%。しまりやや甘い。
 9. にぶい 暗褐色土+暗褐色土 10%。しまりやや甘い。
9. にぶい 暗褐色土土+暗褐色土 30% + ローム粒子 3%。しまりやや甘い。東西南土層
 10. 地山ローム土+暗褐色土 30%。しまりやや甘い。
 11. 地山ローム土+暗褐色土 20%。しまりやや甘い。
 12. 暗褐色土土+地山ローム土 10% 以下。しまりやや甘い。
 13. 地山ローム土+暗褐色土 10%。しまりやや甘い。
 14. 地山ローム土+暗褐色土 30%。しまりやや甘い。
 15. 暗褐色土土+地山ローム土 10%。しまりやや甘い。
 16. 暗褐色土土+暗褐色土 20%。しまりやや甘い。
 17. 地山ローム土+暗褐色土 30%。しまりやや甘い。
 18. 暗褐色土土。しまりやや甘い。
 19. 暗褐色土土+暗褐色土 10%。しまりやや甘い。
 20. 暗褐色土土+暗褐色土 20%。しまりやや甘い。
 21. 暗褐色土土+暗褐色土 10%。しまりやや甘い。
 地山 A. にぶい 暗褐色土土。
 地山 B. 暗褐色土土+暗褐色土 10%。しまりやや甘い。

表 9. SK003 東西南土層 (2)・南北土層 (Fig. 13 s-P-nP) 説明

0. ローム地山上にわざかな汚れ。

1. ローム地山露地土。内れ汚土 (1 層より立地)。暗褐色土 5%。しまり甘い。
 2. ローム地山露地土。暗褐色土 30%。しまり甘い。(根の影響あり)
 3. ローム地山露地土+暗褐色土 20%。しまりやや甘い。(根の影響あり)
 4. ローム地山露地土+暗褐色土 10% 以下。しまりあり
 5. 暗褐色土土+地山ローム土 10% 以下。しまりやや甘い。
 6. 地山ローム土+暗褐色土 40%。しまりやや甘い。
 7. 暗褐色土土+地山ローム土 10%。しまりやや甘い。
 8. 暗褐色土土。しまり甘い。
 9. 地山ローム土。若干の汚れあり。しまりあり

表 10. SK004 土層 (Fig. 14) 説明

口板の掘り込み箇所が認められないため、「剣貫式」木棺であった可能性を考えるが、底面がわざかだが東に深く西に浅いのは、弥生時代後期以来の足元掘込土壙墓の名残りとみるか、北部九州ではなく瀬戸内・近畿地方の剣貫式木棺の影響とみるかが問題だが、おそらく時期的には後者であろう。SK003には、小片ながら古式土師器片が伴い (Fig. 27-1, 2)、古墳時代初頭ないしそれ以降の遺構である可能性が考えられるからである。ただし「木棺墓」と推定した根拠は、確實ではない部分もあり、結論としては、「(小児用) 木棺墓の可能性がある土壙墓」としておきたい。なお先述したように調査区拡張部分の土層の観察からも、削平が想定される点からも、本来の墓壙はさらに広がり、段状の墓壙であった可能性が高い。

・ SK004 (Fig. 14)、卷頭図版 4-2、P.L. 3-12、P.L. 4-1)

調査区東端の落込み遺構 SX000 の上層部をやや掘削し

1. 暗褐色土土 (黒褐色)。ローム粒子 2% 以下。しまりややあり。(へやや甘い)
 2. 暗褐色土土。しまりやや甘い。
 3. 暗褐色土土 50% ~ 暗褐色土 50%。しまりやや甘い。
 4. 暗褐色土土 60% ~ 暗褐色土 35%。しまりあり。ローム粒子少々含む。
 5. 暗褐色土土+ローム粒子+黄褐色土ブロック 20%。しまりやや甘いやや。
 6. 暗褐色土土 40% + にぶい 暗褐色土 30% + 明黄褐色ローム土 30%。しまりやや。粘性ややあり。
 7. 暗褐色土土+黄褐色ローム土 40%。しまりやや。粘性ややあり。
 8. (明) 黄褐色ローム土+暗褐色土 30%。しまりやや。根の影響あり。
 9. 黄褐色ローム土+地山露地土 40%。しまりやや。粘性ややあり。
 10. 黄褐色ローム土+暗褐色土 40%。しまりやや。粘性やや。
 11. 黄褐色ローム土+暗褐色土 25%。しまりやや。(へやや甘い)。粘性あ
12. 黄褐色+明黄褐色ローム土+にぶい 暗褐色土 25%。しまりややあり。粘性やや。
 13. にぶい 暗褐色 (にぶい 黄褐色) 土 + 明黄褐色ローム土 20% + 暗褐色土 25%。しまりややあり。粘性あり。
 14. 明黄褐色ローム土+灰白色土内れ 10%。しまりやや。根の影響あり。
 15. にぶい 黄褐色土+にぶい 暗褐色土内れ 5~10% (明)。しまり甘い (根の影響)。
 16. A. 暗褐色土土。SK004 土上
 B. 暗褐色土土+明黄褐色土内れ若くあり。
 C. 黄褐色土土+ローム地山
 D. 明黄褐色土内れ+灰白色土。鳥糞ローム土と八爪灰粘土の移築層

表 11. SK014 土層 (Fig. 15) 説明

長軸方位は N-82° E である (なお土坑の報告の方方位は全て磁北であり、国土座標北からは約 8.5° 西偏していることに注意)。覆土は主に極暗褐色土で、SK001 や SK002 よりは黒褐色に近くない。SK003 は竹林 (孟宗竹) があった箇所の下部にあり、竹の根の影響が覆土や底面の凹凸に影響していたので土層の観察と解釈には注意を要するが、綫断方向中央の凹みのレベル差は本来のものと考えられ、この部分の横断土層面や横断面形を参照すると、この部分には、幅 30cm 前後、長さ 84cm 程度の木棺があった可能性があり、側板や小

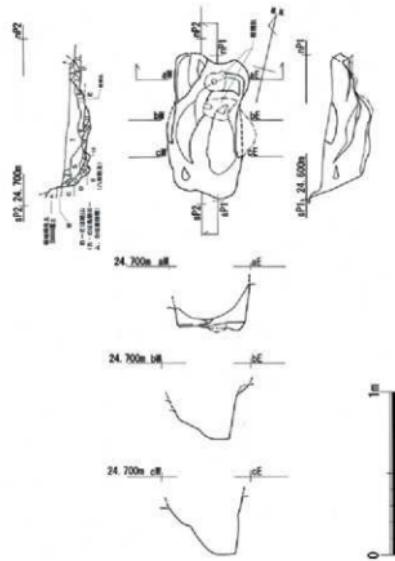
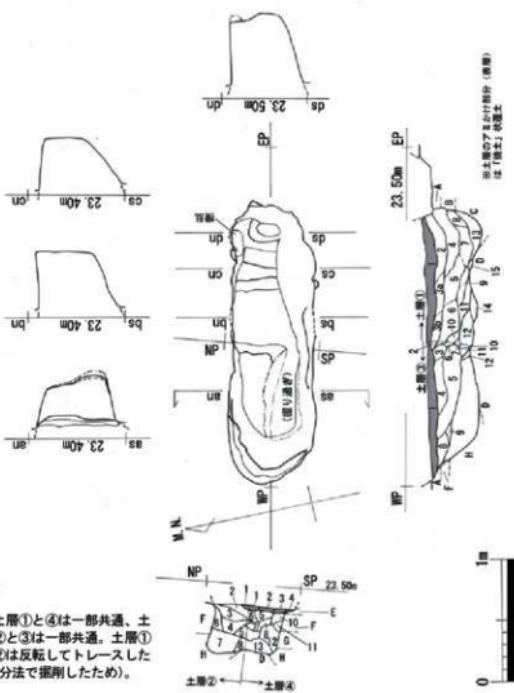


Fig. 15 SK014 実測図・土層図 (1/30)



土層①と④は一部共通、土層②と③は一部共通。土層①と②は反転してトレースした(四分法で掘削したため)。

Fig. 16 SX021 実測図・土層図 (1/40)

(一表 12 土層(1)-(4)(1)の続き)

土層(1)-(3) (2) (WP-EP 土層)

土層①

1. 土層①～1 層、純土状赤褐色土+灰白色粒子 5% 以下

2. 土層④～6 層

3. ややにこない明赤褐色地へややにこない褐色地へ灰白色土 5% 以下、粒子あり

4. ややにこない(明)赤褐色地へややにこない褐色地へ灰白色土 5% 以下、粒子あり

5. 明赤褐色地へ灰白色土 5% 以下、粒子あり

6. 上層①～7 層

7. 土層④～9 層

8. ややにこない赤褐色地(へややにこない褐色地)土、灰白色粒子 5% 以下、し

9. ややにこない褐色地へややこない褐色地

10. 上層④～13 層

11. にこない橙褐色ローム土+褐色

粒子 40%、しりやや甘い、粘性や

ややあり

12. 地山Dの褐色地主体+褐色

13. 褐色ローム(?) 断面(?) 断面土または

下、しりやや甘い、地山Dに

てはしりやけり、粘性やや欠ける(地

山と異なる)

土層②-(4) (NP-SP 土層)

土層②

1. 土層①-1 層

2. 土層①-3b 層に対応、ややにこない

3. ややにこない褐色地(へややにこない褐色地)土+灰白色地へ灰白色粒子 5%、

しりやや甘い、粘性やや欠ける

4. 褐色(明赤褐色)ローム土+灰白

5. 上層①-2 層

6. 上層④～13 層

7. ややにこない褐色地へややこない褐色

8. ややにこない褐色地へややこない褐色

9. ややにこない褐色地へややこない褐色

10. 地山A-D

土層④

1. ややにこない(明)赤褐色地+褐色

2. 褐色ローム(?) 断面地土+褐色地

3. 明赤褐色地+灰褐色地+褐色

4. 棕褐色地+灰褐色地+褐色地

5. 明赤褐色地(?) 地上部

6. 褐色地+灰褐色地

7. 地山E-Fの褐色地+褐色地

8. 地山Gの褐色地+褐色地

9. 地山H-Dの褐色地+褐色地

10. 地山I-Lの褐色地+褐色地

11. 地山M-Nの褐色地+褐色地

12. 地山O-Pの褐色地+褐色地

13. 地山Q-Rの褐色地+褐色地

14. 地山S-Tの褐色地+褐色地

15. 地山U-Vの褐色地+褐色地

16. 地山W-Yの褐色地+褐色地

表 12. SX021 土層 (Fig. 16 WP-EP 土層)

土層①(1) 説明 (1)

褐色土+灰白→褐色地山粒子 5%、
しりややあり、粘性ややありへやや
欠ける

10. ややにこない褐色地へややこない赤
褐色地+灰褐色地+褐色土 5%、し
りやや甘い、粘性やや欠ける

11. ややにこない褐色地+褐色地

12. 明赤褐色地+褐色地+褐色地

13. 地山A-Dの褐色地+褐色地

14. 地山E-Fの褐色地+褐色地

15. 地山Gの褐色地+褐色地

16. 地山H-Dの褐色地+褐色地

17. 地山I-Lの褐色地+褐色地

18. 地山M-Nの褐色地+褐色地

19. 地山O-Pの褐色地+褐色地

20. 地山Q-Rの褐色地+褐色地

21. 地山S-Tの褐色地+褐色地

22. 地山U-Vの褐色地+褐色地

23. 地山W-Yの褐色地+褐色地

表 13. SX021 土層 (Fig. 16 WP-EP 土層(2) 土層(3) NP-SP 土層(2)・(4)) 説明 (2)

た面で検出した土坑である (Fig. 5、巻頭図版 2-1・2 の調査区東壁側中央の斜めにある長方形の構造)。ほぼ長方形のプランで、幅 46～56cm 前後 (南西側がわざかに広い)、長さ 114cm 前後である。ここで注意すべきは、北西側長辺西側のプランが曖昧というか出っ張ったような感じであったので不審に思ったが、この部分の下部は深くなり、どうも重複するより新しい別の柱穴 (SP050 とする) を調べて一緒に掘削してしまったよう

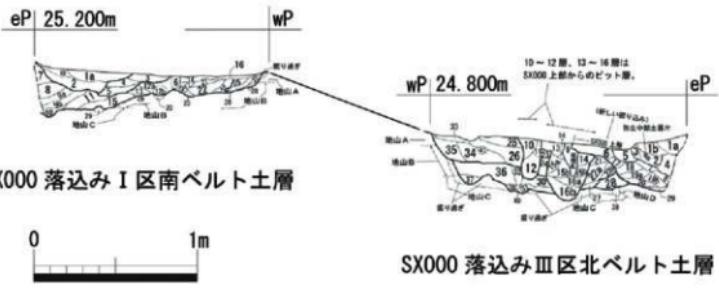


Fig. 17 SX000 落込み I 区南ベルト土層

SX000 落込み I 区南ベルト土層

- 1a. (10% 植物) 暗褐色土 + 短褐色 + 暗褐色
土 10% + 黄褐色土 5% + 塩化物
1b. (2%) 暗褐色土 10% (7.5~10)
+ 暗褐色土 10%。しまりややあり
2. (10%) 暗褐色土 + 増黄褐色土 20%。
しまりややあり
3. (10%) 增黄褐色土 + 増黄褐色土 ~
暗褐色土 20%。しまりややなし。
4. 黑褐色土 ~ 增黄褐色土 (10%) + 增
褐色土 10%。しまりややあり。
5. (7.5%) 增黄褐色土 + 增黄褐色土 (10%)
30%。しまりややなし。
6. 暗褐色土 (にじる) 色土。しまりや
い (根の影響)
7. (5.5%) 暗褐色土。しまりやや
ある。
8. 黄褐色土 + 增黄褐色土 10%。しま
りややあり。
9. (10%) 增黄褐色土 + 增黄褐色土 (20~40%) + にじる 黄褐色土 (半干
しまりややあり ~ やや甘い。9 層
下) + 増黄褐色土 (入が多) 40% ~ 90%
層。9 層上半は 増黄褐色土 20% ~ 90% 増
褐色土 10% + 增黄褐色土 10% ~ 增
褐色土 20%。しまりひげい (根
の影響)
- 地山 A. にじる 暗褐色土 + 增黄褐色土 5%
+ 增黄褐色土 10%。しまりや
や甘い。
11. 増黄褐色土 + 增黄褐色土 (10%) 増黄褐色土 30% + にじる 黄褐色土 15%。しまりや
や甘い。
- 12a. (7.5~10%) 增黄褐色土 + 增黄褐色
土 20% + にじる 黄褐色土 5%。しま
りやや甘い。
- 12b. (10%) 増黄褐色土 + 增黄褐色
土 30% + しまりややあり ~ やや甘
い。
13. (7.5%) 増黄褐色土 + 増黄褐色土 10%。
しまりやや甘い (根の影響)
14. (10%) 增黄褐色土 + 増黄褐色土 25%
しまりややけへい。6 倍 2%
15. (7.5%) 增黄褐色土 + 增黄褐色土 20%
+ (10%) 增黄褐色土 + 増黄褐色土 10%。
しまりややあり ~ しまりあり
16. (7.5%) 增黄褐色土 + 增黄褐色土 15%。
しまりやや甘い。
17. (7.5%) ややや明るい 増黄褐色土 +
增黄褐色土 30%。しまりややあり ~
やや甘い。
18. 増黄褐色土 + (10%) 增黄褐色土 30%
+ にじる 色土 (褐色土) 20%。しま
りやや (根の影響)
19. (10%) 增黄褐色土 + にじる 黄褐色
土 40%。しまりやや (根の影響)
20. にじる 暗褐色土 + 増黄褐色土 40%。
しまりや (根の影響)
21. (10%) 増黄褐色土 60% + 增黄褐色土
40%。しまりやや (根の影響)
22. 增黄褐色土 + 增黄褐色土 25% + 增
褐色土 10% ブロック + にじる 暗褐色
土 10% ブロック + にじる 暗褐色土

(～にじる 黄褐色土) + 増黄褐色土 10% + 増黄褐色土 3%。しまりやや甘
い。

23. 地山 D 崩落土。にじる 黄褐色 + ぶ
い 滲化粘土質土 + 灰白色粘土 5% + 増
黄褐色土 5%。しまりやや甘い。粘性
あり。

24. 增黄褐色土 + (10%~5%) 增
褐色土 30% + にじる 增黄褐色土 3%。しま
りややあり。

25. 增黄褐色土 + 增黄褐色土 15%。
しまりや甘い。

26. 增黄褐色土 + 增黄褐色土 10% + に
じる 增黄褐色土 3%。しまりややあり

27. 增黄褐色土 + 增黄褐色土 30% + に
じる 黄褐色土 (にじる) 增黄褐色土 20%。
しまりやや甘い。

28. 增黄褐色土 + 增黄褐色土 10%。
しまりややあり。

29. 地山 C、D 崩落土 + にじる 增黄褐色
土 + 灰白色粘土 5% + 増黄褐色土 3%。
しまりややあり ~ やや甘い。粘性
あり。

30. 地山 C 崩落土。やややぶい 黄
褐色土 + 灰白色粘土 5% + 増黄褐色土 3%。
しまりややあり ~ やや甘い。粘性
あり。

31. 地山 C 崩落土。やややぶい 滲化粘
土 + 灰白色粘土 3%。しまり
やややあり ~ やや甘い。

32. にじる 增黄褐色土 + 灰白色粘土 5%
+ にじる 增黄褐色土 25%。しまり甘い (根
の影響)

33. にじる 增黄褐色土 + 增黄褐色土 +
灰白色粘土 10%。しまりやや甘い。

34. 地山 A、B 崩落土。やややぶい 增
黄褐色土 + 增黄褐色土 25% (黄褐色
土 5%)。しまりやや甘い。

35. 地山 A、B 崩落土。やややぶい 增
黄褐色土 + 灰白色粘土 + 增黄褐色土 25%。
しまりややあり ~ やや甘い。粘性あり。

36. (6%) 增黄褐色土 + 增黄褐色土 10%
+ 增黄褐色土 20% + 增黄褐色土 5%。
しまりやや (根の影響)

37. 地山 B、C 崩落土。やややぶい 增
黄褐色土 + 增黄褐色土 20% + 灰白色粘土
+ ブロック 10% + にじる 增黄褐色土 5%。
しまりやや甘い。

38. 地山 C 崩落土。 (增黄褐色土質土) +
灰白色粘土 10% + 增黄褐色土 2%。
しまりやや甘い。

39. 增黄褐色土 + 增黄褐色土 20% + に
じる 增黄褐色土 50%。しまりなし (根
の影響)

40. 増黄褐色土。しまりや甘い (根擾乱
の影響)

41. 増黄褐色土 + 增黄褐色土 40%。し
まりやや (根擾乱)

地山 A. やややぶい 黄褐色土 + 灰白色粘
土

地山 B. やややぶい 黄褐色土 + 灰白色粘
土 + 増黄褐色土 10%。しまりやや (根
の影響)

42. 増黄褐色土 + 增黄褐色土 10%。
しまりやや (根の影響)

43. 増黄褐色土 + 增黄褐色土 25% + 增
褐色土 (10%) 10%。しまり
やや甘い。

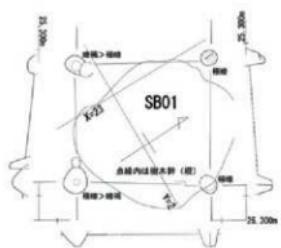
44. 增黄褐色土 + 增黄褐色土 30% + 增
褐色土 10%。しまりやや ~ 甘い。

45. 増黄褐色土 + 增黄褐色土 25% + 增
褐色土 (10%) 10%。しまりや
やや甘い。

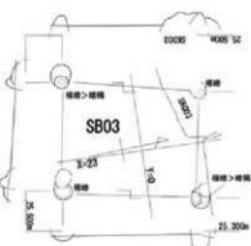
46. にじる 增黄褐色土 + 增黄褐色土 10%
+ 增褐色土 5%。しまりやや甘い。

表 14. SX000 落込み遺構土層 (Fig. 17) 説明

であり、結果的に縦断土層断面はこの柱穴部分の土層にかかってしまったと判断した。このこただしことでも勘案しても、底面は南西側が深くなる部分があることが確認された。結論的に言うと、この土坑は弥生時代後期の「足元掘込土壙墓」である可能性が高い。底面までの深さは、北東側で 24~27cm、中央や北東寄りから南西側へ深く傾斜し、SP050 の影響を受けていない SK004 の南西側底面が残る箇所は深さ (検出面レベルがわずかに高い北東側を基準とする) 50~53cm である。もちろん東側の谷部側とはいえ削平が考えられるから、本来の深さはもう少しあり、この上方は外側に広がる段掘りであった可能性が考えられる。覆土は、極暗褐色土を基調とする。出土遺物が無いので正確なことは言えないが、足元掘込土壙墓の型式変化の傾向から、「足



実測立柱建物の方位は国土座標北



元の掘り込みがやや浅く退化している傾向の型式としてSK004は認識できるので、おそらく弥生時代後期前葉～後期中葉頃の遺構であろうと考えられる。なお長軸方位は、N=51.5°-Eである。他の墳墓の可能性が考えられる土坑(SK002, SK003)とははやや異なる方位となっている。

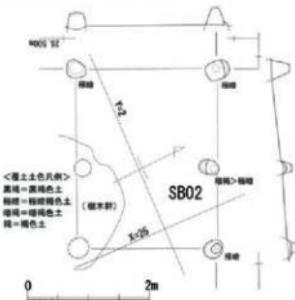


Fig. 18 SB01・02 実測図 (1/80)

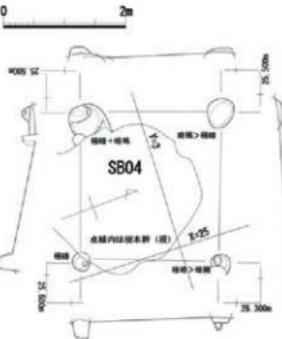


Fig. 19 SB03・04 実測図 (1/80)

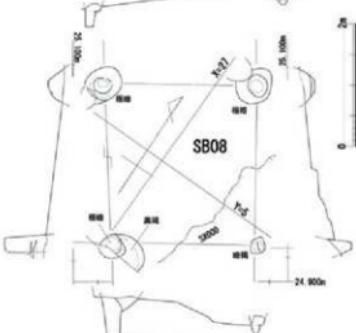
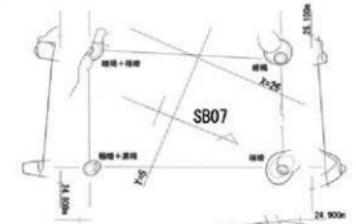


Fig. 21 SB07・08 実測図 (1/80)

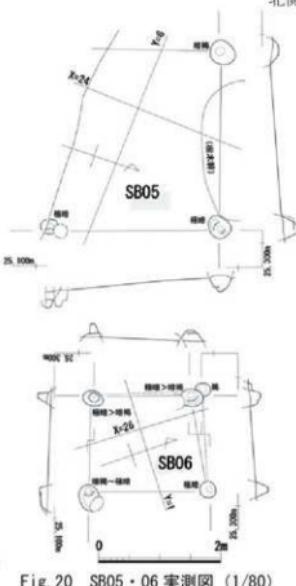


Fig. 20 SB05・06 実測図 (1/80)

・SK014 (Fig. 15, 卷頭図版4-3, P.L. 4-6-7)

SK004と同様に、SX000の上層掘削途中で検出した土坑だが、SK004の検出面よりも若干下のレベルで検出できた。他の遺構との重複関係の影響や検出レベルが一定ではない(南側が高いレベルで検出)ことにより平面プランがやや不整形に見えるが、およそ略長方形をなす。南側は約40cm幅、北側は約48cm幅、長さ85～90cm、長軸方位はN=11°-Wで、やや離れているが直交させるとSK001に近い。深さは検出レベルに南北差があるので高い方の南側を基準とすると、底面南側が32cm、中央が38cmと最も深く、北側は段状に上がって26cm前後になる。もとより検出レベルが下がった状態での平面形・深さであるので、本来形状を推測する必要があるが、特に北側が検出レベルが下がってしまったこと、北側の底面レベルが一段上がるることを考慮

して推測すると、北側はさらに一段上がって広がるものと考えられ、検出状況で「中央」とした最も深い底面箇所は南側壁面の傾斜角度が急であることも考慮し、本来は土坑の中ではやや南側に偏った位置になると考えられる。すなわち本来の形状は、「足元掘込土壌」状になると考えられる。遺存状況が悪いため断定できないが、SK014も「足元掘込土壌墓」の可能性があるものとして考えておきたい。なお遭構の覆土は黒褐色に近い極暗褐色土を基調としていたので、遺物の出土はないが、足元掘込土壌墓の可能性も考慮して弥生後期の可能性を考えておきたい。

・SX021 (Fig. 16、巻頭図)

版4-4~8、PL. 4-8~11)

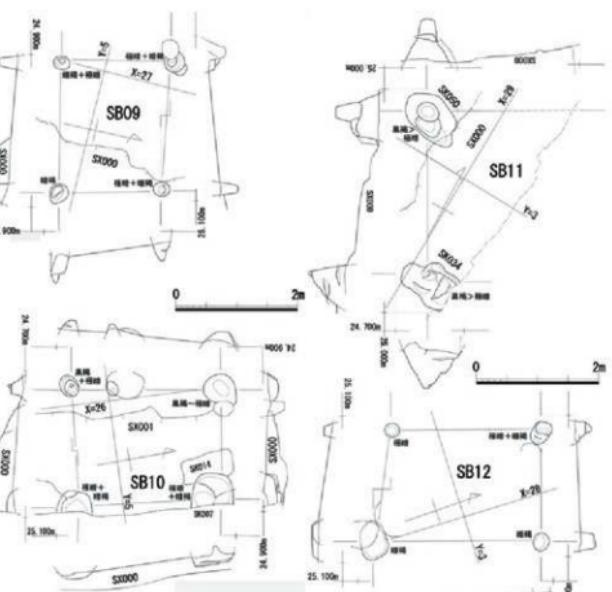


Fig. 22 SB09・10 実測図 (1/80)

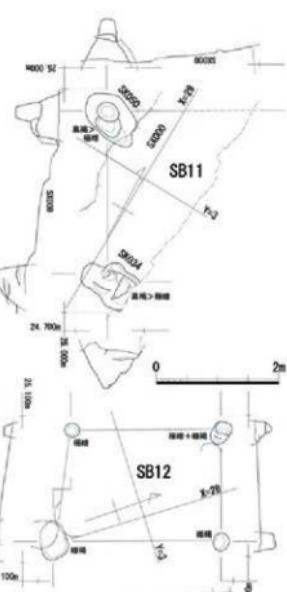


Fig. 23 SB11・12 実測図 (1/80)



Fig. 24 SB13・14 実測図 (1/80)

調査区中央南辺、X=11~12 ライン前後で検出した土坑(?)。(?)を付したのは、下部の土層が地山よりはしまりが甘く掘削できるものとして判断したが、たとえば植物根の影響によるものであった可能性もあるため、不明確なところが多く、果たして人為的など「土坑」かどうかや疑問も残るためである。ただし検出時には、表面が明赤褐色～赤橙色の「焼土」状であったため(巻頭図版4-4)、いわゆる「焼土坑」の可能性を考え調査し、四分割して掘削して縦横の土層を観察・記録した。しかしながら、「焼土」状であったのは検出時表面の最上層だけであり、壁面や床面が焼けているというような状況は観察されず、はたして「焼土坑」かどうか疑問もあり、表層の「焼土層」だけが遭構で、下部は自然遭構を掘り誤ったか、あるいは人為的土坑としても性格不明の土坑であり、そのため「SX」を付している。以下、一応「遭構」としての記録を報告しておく。平面形は東西側の短辺が丸くなる略長方形で、西側がやや狭く 58cm 幅前後、中央が 65~68cm 前後、中央や東側がもっとも広く 72cm が最大幅、東側は 65cm 幅で、長さは 230~234cm である。長軸方位は 78.5°-E である。横断面は、南北壁は急傾斜ながら斜めであるが、北壁はほぼ垂直か若干オーバーハングしている。底面は中央から西側は平坦に近いが北側がわずかに深くなり、西端は南側がやや凹み、東側では若干掘り過ぎた傾向があるが中央と逆に南側がやや凹んでいたようである。覆土は表層こそ「焼土」状であったが、下部は地山の再堆積または地山を掘り返してすぐ埋めたような、若干汚れた地山土で占められ、暗褐色土以上の暗色の有機質土壌起源の覆土はほとんど観察できなかった。最後の点も、人為的「土坑」であったか疑問として残る点である。一応、「性格不明土坑」として報告しておく。なおいくつかのビット(柱穴としてよさそうなものも含まれる)に切られている。

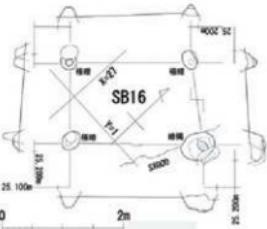
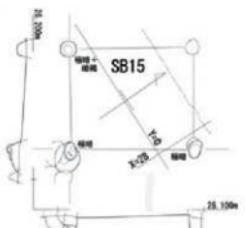
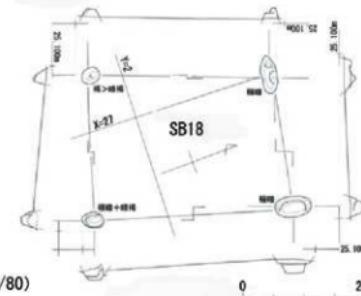
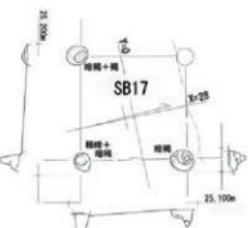


Fig. 25 SB15・16 実測図 (1/80)



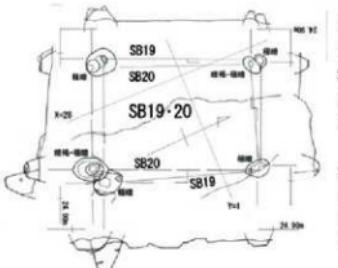
・SK006 (Fig. 5、巻頭図版 4-11)

調査区東端 SX000 落込み構造上面で検出した。紙幅の都合で個別図は示さない (Fig. 5 参照)。東側が調査区外になり全形不明だが、長さ 110cm + α、幅は推定 45~50cm 前後の長楕円形状土坑。検出面からの深さは 14cm が最深。長軸方位は推定 N (磁北) -7° E。覆土は暗褐色と極暗褐色の中間。遺物の出土はないが、土色と層位から古墳時代以降と推定する。SK007 を切る。

・SK007 (Fig. 5、巻頭図版 4-10・11)

SK006 に切られる、SX000 上層で検出した遺構 (Fig. 5 参照)。南西側が張り出す不整円形で、南北 72cm、東西 65cm 以上 (推定約 85cm) である。深さは南側で 26cm、北側で 19cm 前後

Fig. 26 SB17・18 実測図 (1/80)



を測る。覆土は暗褐色気味の極暗褐色土で SK006 とは微妙な差異であったが、SX000 上層覆土とは区別が比較的明瞭だった。ただし SK007 北側 (SK006 重複部分斜下部) は、SB10 (Fig. 22) の柱穴が重複している可能性がある。弥生後期の土器底部が出土しているが (Fig. 29-3)、厳密には伴わず、混入の可能性がある。

その他、「SK」としたものには、柱穴であったり、複数の柱穴の集合であったりしたものがいる。SK050 (Fig. 7、PL. 4-4・5) は、「土坑」ではなく、大型の柱穴と判断した。64×110cm の長楕円形で、中央や西側のピット状落込み部分は深さ 73cm となる。SK034 とセットで建物 (SB11、Fig. 23) を構成する可能性がある。

(2) 落込み構造 SX000 (Fig. 7、土層は Fig. 8~10・17、巻頭図版 1~3・6、巻頭図版 2~2・3、巻頭図版 4~12)

調査区東端で検出した谷頭とも考えられる落込み状の構造。調査区東半位あたりから東側へ地山ローム上面に薄く堆積していた極暗褐色土の二次的包含層が北側で X=28.9、南側で X=27.8 あたりを結ぶライン上で、東側にさらに傾斜して落ち込む部分を「SX000」とした。当初は人為的な溝状構造の可能性なども考えたが、遺物の出土は少量で、また底面の凹凸が激しいため、自然地形の一部と判断した。また調査区東側の遺構密集区域と重なり、SX000 上面、また SX000 の掘削途中でも重複する遺構が確認でき、底面の凹凸の一部は上部で検出できなかつた別の遺構とも判断される。実際土層の観察・検討でも (Fig. 8・10・17)、自然堆積だけでなく、上面から複数の遺構と思われる土層が切り込んでいるのが分かる。検出時の上面は暗褐色気味の極暗褐色土だが、その直下は黒褐色に近い極暗褐色になり、地山ブロック混じりの土層が多い。出土遺物があるが (Fig. 29-9~12)、重複構造の遺物を含む可能性がある。ただし弥生中期前半頃の土器が複数出土している (Fig. 29-10・11) ので、その時期に包含層の堆積が進んだ可能性を考えたい。弥生後期の可能性を指摘した SK004、SK014 が切り込むことと矛盾しない。

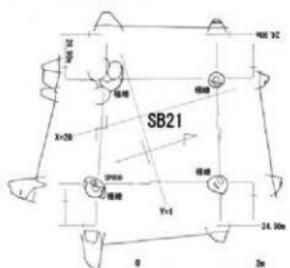


Fig. 27 SB19・20, SB21 実測図 (1/80)

が多い。出土遺物があるが (Fig. 29-9~12)、重複構造の遺物を含む可能性がある。ただし弥生中期前半頃の土器が複数出土している (Fig. 29-10・11) ので、その時期に包含層の堆積が進んだ可能性を考えたい。弥生後期の可能性を指摘した SK004、SK014 が切り込むことと矛盾しない。

(3) 挖立柱建物 (SB) (Fig. 18~28、掘立柱建物の位置はFig. 5・7)

弥永原18次では、東半調査区を中心に多数のピット群が検出された。現場では、いくつか「並びそう」との認識を持ったピットの組み合わせやピット列があったが、調査中には明確に掘立柱建物を復元することはできなかつた。しかし「調査の概要」すでに述べたように、ほぼ全てのピットの覆土の土色や質のメモを記録したので、整理時にピットの土色によって色分けすると、「掘立柱建物」としてよさそうなピットの組み合わせが多数浮かび上がつた。25棟の掘立柱建物の可能性があるピット(柱穴)の組み合わせがあるが、そのうち23棟を個別に図示し(残りのSB24, SB25についてはFig. 7参照)、また根拠の一つとなつた各ピットの土色を図に示した。以下、紙幅の都合上から各建物について簡潔に報告する。なお以下の記述での「方位」は国土座標北を意味し、土坑の報告と異なるので注意されたい。

SB01 (Fig. 18) は、 1×1 間、桁行 2.20~2.24m × 梁間 1.94~2.00m(規模は柱底間の距離)、長軸方位は N-33.5° -E である。柱穴覆土は主に極暗褐色土である。SB02 (Fig. 18) は、桁行西側の柱穴部の一部が樹木の幹を除去できなかつたため不明であるが、推定 1×2 間、桁行 2.92m × 梁間 2.32m、長軸方位は N-64° -W である。柱穴覆土は主に極暗褐色土である。SB03 (Fig. 19) は、北西隅柱穴が SK003 に切られるとみて、 1×1 間、桁行 2.22m × 2.24m × 梁間 1.68~1.80m、長軸方位は N-15° -E である。柱穴覆土は主に極暗褐色土である。SB04 (Fig. 19) は、 1×1 間、桁行 2.44m × 梁間 2.20~2.32m、長軸方位は N-68° -W である。柱穴覆土は主に極暗褐色土である。SB05 (Fig. 20) は、Fig. 28 SB22・23 実測図 (1/80) 南東隅の柱穴が調査区外になると想定して、推定 1×1 間、桁行 2.94m × 梁間 2.80m、長軸方位は N-71° -E である。柱穴覆土は極褐色~極暗褐色土である。SB06 (Fig. 20) は、平面台形状でやや歪んでいるが、斜面下方側の梁間がやや広がるのは小型の建物では建築構造上ありうるので問題ない(北西隅の柱穴をより外側のピットに比定して「歪み」を少なくする案もあるが、その場合は該当ピットが他より浅く覆土が褐色で他と異なるので問題がある)。 1×1 間、桁行 1.60~1.96m × 梁間 1.54~1.60m、長軸方位は N-18° -W である。柱穴覆土は極暗褐色(~暗褐色)土である。SB07 (Fig. 21) は、 1×1 間、桁行 3.20m × 梁間 1.76~1.96m、長軸方位は N-21° -W である。柱穴覆土は主に極暗褐色土で、暗褐色土や黒褐色土が混じる。SB08 (Fig. 21) は、 1×1 間、桁行 2.60~2.64m × 梁間 2.36~2.56m、長軸方位は N-33.5° -W である。柱穴覆土は主に極暗褐色土、一部暗褐色土である。SB09 (Fig. 22) は、 1×1 間、桁行 2.12~2.16m × 梁間 1.70~1.80m、長軸方位は N-81° -E である。柱穴覆土は主に暗褐色土で一部に極暗褐色土が混じる。SB10 (Fig. 22) は、 1×1 間、桁行 2.32~2.44m × 梁間 1.80~1.94m、長軸方位は N-10° -E である。柱穴覆土は主に極暗褐色土である。なお SB10 は南側にもう 1 間(柱間距離で言う



Fig. 29 弥永原18次出土遺物実測図 (1/3)

と SB11 (Fig. 23) は、SK005 と SK034 とした土坑状の大型柱穴が組み合うと考えた建物跡で、おそらく東側に展開する。SK034 は SX000 の掘削途中で検出した (Fig. 7、土層は Fig. 10)。両柱穴間は 2.60m で、このラインを SK 005 で東に直交させると調査区には 2.34m だが対応すると思われる大型ピットの端も検出できていないので、おそらく東側の柱穴との芯々間は 2.6m 以上となり、上記二柱穴間に梁間であろう。そうすると長軸方位は二柱穴を結ぶラインの直交となり、N=62° -E 前後と想定される。柱穴覆土は主に黒褐色土であり、弥生時代の可能性がある。SB12 (Fig. 23) は、1×1 間、桁行 2.48～2.76m×梁間 1.86～1.88m、長軸方位は N=18° -W である。柱穴覆土は主に極暗褐色土、一部暗褐色土である。SB13 (Fig. 24) は、1×1 間、桁行 2.10～2.20m×梁間 1.46～1.54 m、長軸方位は N=30° -E である。柱穴覆土は主に極暗褐色土で一部暗褐色が混じる。SB14 (Fig. 24) は、東隅角の柱穴は調査区外となるが、おそらく 1×2 間、桁行 3.04m×梁間 2.62m (調査区外の北東側は推定 2.72m 前後) で、長軸方位は N=73° -E である。柱穴覆土は主に極暗褐色土で、一部黒褐色土が混じる。SB15 (Fig. 25) は、北隅角の柱穴が調査区外と推測される。1×1 間、桁行 2.04m×梁間 1.64m、長軸方位は N=36.5° -E である。柱穴覆土は主に極暗褐色土。SB16 (Fig. 25) は、1×1 間、桁行 2.00～2.14m×梁間 1.28～1.34m、長軸方位は N=45° -E である。柱穴覆土は主に極暗褐色土、一部暗褐色土である。SB17 (Fig. 26) は、北隅角の柱穴が調査区外と推測される。1×1 間、桁行 1.78m×梁間 1.76m、長軸方位は N=14° -E である。柱穴覆土は主に暗褐色土で、極暗褐色または褐色土が混じる。SB18 (Fig. 26) は、やや歪んで復元に不安もある。一応、1×1 間、桁行 3.02～3.28m×梁間 2.14～2.34m、長軸方位は N=19° -E である。柱穴覆土は主に極暗褐色土だが、南西隅角の柱穴は暗褐色～褐色であり、復元に無理がある可能性もある。SB19 (Fig. 27) は、SB20 と重複し、SB20 より古い建物だが建替えか。1×1 間、桁行 2.56～2.60m×梁間 1.82～2.00m、長軸方位は N=22.5° -E である。柱穴覆土はほぼ極暗褐色土。SB20 (Fig. 24) は、SB19 を切る建物で、1×1 間、桁行 2.66～2.75m×梁間 1.66～1.70m、長軸方位は N=25° -E である。柱穴覆土は主に極暗褐色土で、一部暗褐色土が混じる。SB21 (Fig. 27) は、1×1 間、桁行 1.86～2.06m×梁間 1.68～1.70m、長軸方位は N=18° -E である。柱穴覆土は主に極暗褐色土である。SB22 (Fig. 28) は、1×1 間、桁行 1.50～1.56m×梁間 1.36～1.52m、長軸方位は N=7° -E である。柱穴覆土はほぼ暗褐色土で、古代以降の可能性がある。SB23 (Fig. 28) は、北東隅角の柱穴は調査区外とみられる。1×1 間、桁行 1.70m×梁間 1.38m (東側はおそらくやや広がり 1.44m 前後になるか)、長軸方位は N=86.5° -W である。柱穴覆土は主に極暗褐色土で、若干暗褐色土が混じる。SB23 の北西隅角の SP016 から、古式土器師器の甕の破片が出土しており (Fig. 29-5)、古墳前期の可能性がある。SB24 (Fig. 7) は個別図面を作成していないが、1×1 間以上、桁行 2.67m×梁間 2.54m、長軸方位は N=31° -W である。柱穴覆土は極暗褐色土か暗褐色土、またはその混合土。SB25 (Fig. 25) は、1×1 間、桁行 2.54～2.60m×梁間 2.2m、長軸方位は N=7° -E である。柱穴覆土は主に極暗褐色土、南西隅角の柱穴は「SK012」(柱穴の集合、巻頭図版 4-9) の一部で、黒褐色～極暗褐色土である。

なお各建物の重複関係について記しておきたい。SB01 は間に別のピットを介して SB04 を切る。SB03 は SK 003 に切られる。SB08 と SB09 は南東隅角の柱穴が同一だが柱の建替えと考える。ただし前後関係は不明。SB05 は SB07 に切られ、SB07 は SB08 と SB10 を切り、SB13 と SB14 に切られる。SB08 は SB10 に切られる。SB06 は SB 15 に切られる。SB08 は SB25 を切る。SB09 は SB13 に切られる。SB12 は SB21 との関係に一部矛盾があるが、SB 21 の南東柱穴 SP050 は SK004 を切り、SP050 の北西柱穴は明確なので、SB12→SB21 の可能性が高く、SB12 の北西隅角と SB21 の南西隅角の柱穴の切り合いで関係の認識を誤ったと考えておく。SB12 は SB15 を切り、SB24 に切られる可能性が高い。SB16 は SB18 と SB22 に切られる。SB19 は SB20 に切られ (建替え)、SB20 は SB23 も切る。SB24 は SB25 に切られる。また、各建物の方位傾向についても整理したいが、余裕がなく今後の課題としておく。以上の「掘立柱建物」については、あるいは「建物」としての復元に無理があるものも含まれているかもしだれないが、調査・報告者としては、可能性の提示を含めて報告しておきたい。しかし、方位についてはいくつかのまとまりがありそうなので、結果的には妥当な復元であるものが多いと考えている。その他、「SK013」(Fig. 5・7) としたものは極暗褐色土であるが、中世の瓦質土器鉢類 (Fig. 29-4) が出土し、中世の柱穴と考える。SX000 上面の「SK011」(Fig. 5) は、柱穴の重複であろう (SK011b は SB10 の一部とした)。

4. 出土遺物 (Fig.29)

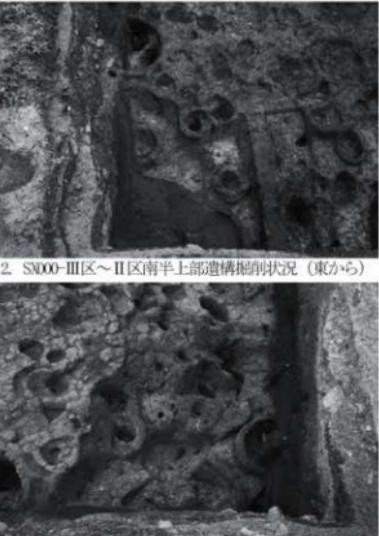
弥永原 18 次における遺物の出土は全体に僅少であり、土器細片が多い。図化できないものが多いが、弥生時代中期から古墳時代前期の土器片が最も多い。図化できたものを Fig. 29 に示した。以下、簡潔にいくつか説明しておく。1,2 は古墳時代初頭の同時期でもよい組み合わせである。6 は弥生終末期前後の在来系土器であるが、出土した「SK019」は攪乱の可能性もある遺構である。7 の須恵器は調査区南壁東端近くの包含層出土 (Fig. 7)。9 はおそらく縄文時代後期の粗製鉢。8, 13, 14 は近世ないし一部近代の遺物。少ない遺物量の中でも弥生時代中期～古墳時代前期 (建物群や土坑の大半はこの時期幅であろう) と近世以降がややあるが、古墳時代中期以降と古代～中世の遺物があまりない。弥永原 18 次地点の遺跡としての利用期間の傾向を示すであろう。

III. 調査のまとめ

数行しかいないが要点を記す。弥永原 18 次は遺跡の縁辺部とみられ、建物群といつかの土坑がみられたが、遺物は少なかった。建物も同時存在はわずかと想定される。土坑のうち、SK002, SK003, SK004, SK014 は弥生後期から古墳初頭の墳墓の可能性が高く、SK001 もその可能性がある。弥永原 1 次、6 次、15・16 次での弥生時代墳墓群とは遺構密度が異なるが、その相違がどのような性格や背景によるものかの解明が今後の課題であろう。



1. 調査区全景（西から）



2. SX000-III区～II区南半上部遺構掘削状況（東から）



3. SX000-II区南側～III区下部遺構掘削状況（南から）

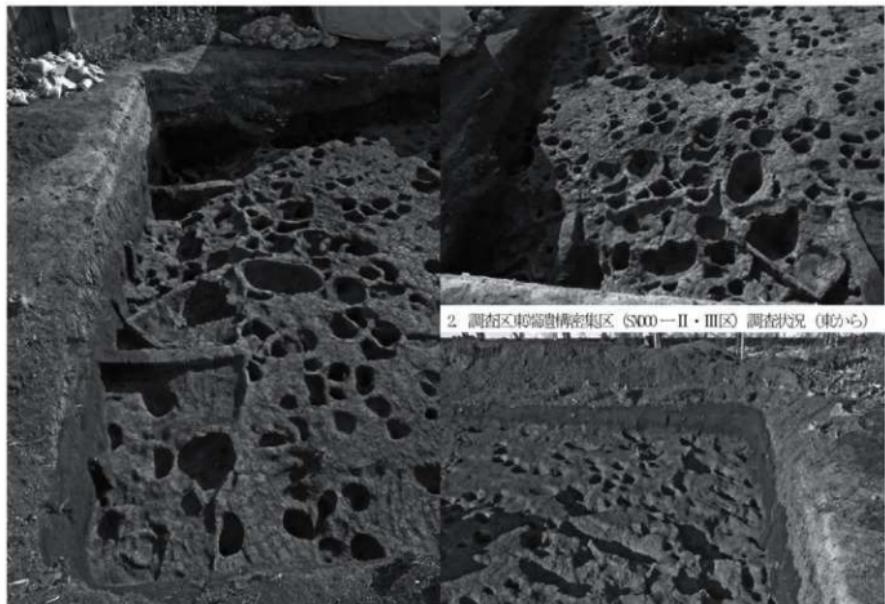


4. SX000-II～III区下部遺構掘削状況（北西から）



5. 調査区東側遺構密集区調査状況（南東から）

6. 調査区東端遺構密集区・落ち込みSX000調査状況（南から）



1. 調査区東端遺構密集区・落ち込み SN000 調査状況（北から）



4. 調査区東側遺構密集区・SN000 下部遺構完掘状況（北から）



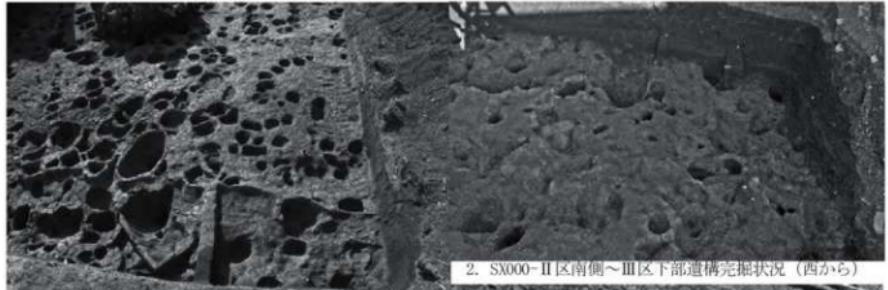
2. 調査区東側遺構密集区 (SN000-I・II・III区) 調査状況（東から）



3. 調査区東側遺構密集区・SN000 下部遺構完掘状況（南から）

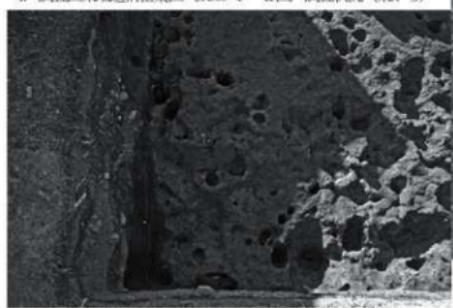


5. SN000-II区～I区南下部遺構完掘状況（東から）



1. 調査区東部縫隙密集区 (SX000-I・II区) 調査状況 (東から)

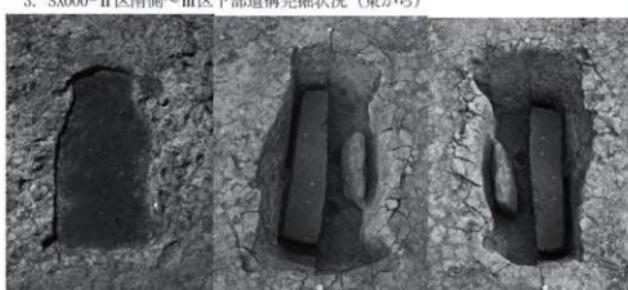
2. SX000-II区南側～III区下部遺構完掘状況 (西から)



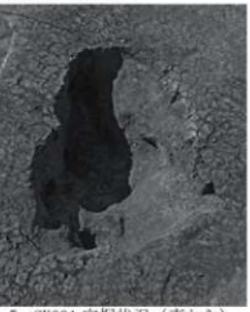
3. SX000-II区南側～III区下部遺構完掘状況 (東から)



4. SK001 完掘状況 (北から)



6. SX002 上面突出状況 (東から) 8・9. SK002 側板・小口板痕跡掘削状況 (東から・西から)



5. SK001 完掘状況 (東から)



7. SX002 北側側板痕跡掘削状況 (東から)

10・11. SK002 掘方完掘状況 (東から・西から)



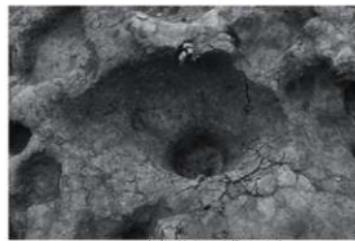
12. SK001 完掘状況 (南東から)



1. SK004 完掘状況（北西から）



2. SK003 完掘状況（南から）



5. SK005 完掘状況（北から）



4. SK005 完掘状況（西から）



3. SK003 完掘状況（東から）



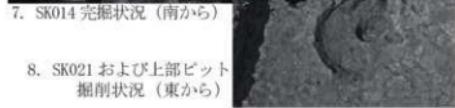
6. SK014 完掘状況（東から）



7. SK014 完掘状況（南から）



9・10. SK021 完掘状況（東から・西から）



8. SK021 および上部ピット
掘削状況（東から）



11. SK012（柱穴複数）
掘削状況（北から）

報告書抄録

ふりがな	やながほる10—やながほるいせきだい18じちょうきのほうこく—
書名	弥永原10
副書名	—弥永原遺跡第18次調査の報告—
巻次	
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	1466
編著者名	久住猛雄
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8821 福岡市中央区天神1丁目8-1 電話番号 092-711-4667
発行年月日	西暦2022年3月24日

遺跡名ふりがな	やながほるいせきだい18じちょうき			
遺跡名	弥永原遺跡第18次調査			
所在地ふりがな	ふくおかしみなみくおさ3ちょうめ42ばん1			
遺跡所在地	福岡市南区臼佐3丁目42番1			
市町村コード	40134			
遺跡番号	0106			
北緯	33度31分50秒（世界測地系）			
東経	130度26分26秒（世界測地系）			
調査期間	2020年8月～2020年10月			
調査面積（m ² ）	272.25 m ²			
調査原因	学生寮建設工事			
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
集落・墳墓	弥生時代、古墳時代、飛鳥時代、鎌倉時代、室町時代、江戸時代	土坑、土塹墓、足元覆込土塚墓、埴輪墓、撫立柱建物、柱穴、落込み（谷状）遺構	陶文土器、弥生土器、古式土器、土師器、須恵器、中世瓦質土器、肥前系近世陶磁器、近世土器質土器、土製品	遺跡の遺存状況などを見ると、本采は西側が高かったと考えられるが、西側は原点に削平されているともされる。遺構は、主に南区の東半分で認められ、旧地形も東側が既く削平して西側よりも低いと推定された。また東側は落込み状になつておらず、谷須地帯ともみられる。多くは中小のピット群であり、ピットの土色ごとに整理すると建物として整ひたうものが多数あり、多くは柱穴と考えられる。多くは圓頂光であるが、ピット覆上の同一性などを根拠に、25棟前後の撫立柱建物を復元した。ただし出土遺物が極少であり、時期不明なものが多いため、しかしながら柱穴埋土土色やわずかな出土遺物から、弥生時代から中世までの各時期に及ぶものと見られる。また、土坑を8基確認した。土坑の内、6基は撫立柱建物の柱穴からなる。馬、足元等は土壁面の可動部があるものが2基、土壁面の可動性があるものが1基、埴土坑とみられるものの計1基であった。且元は性格不明土坑である。いずれの遺構も出土遺物が無いか甚少であるが出土遺物があるものでは、推定土塚墓の1基は古墳時代後期とみられ、足元附近土塚墓は駒頭から弥生時代後期であろう。

(表紙写真説明)

表表紙中央：SK002 半歳東西土層断面状況（北から）、表表紙右上：SK002 下層出土赤色粒子（顔料？）写真
裏表紙：弥永原遺跡 18 次調査全景（西から）

弥永原 10

—弥永原遺跡第18次調査の報告— 福岡市埋蔵文化財調査報告書第1466集

2022年3月24日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目8-1

印刷 株式会社 親和プロセス
福岡市南区塙原1丁目4番4号

